

パーフェクト・ソルジャー

Perfect Soldier

ダークサイド・オブ・マイ・マインド X3

The Darkside of my Mind -X3-

## 草案 未完

どうして僕がこんな訓練に参加しなくてはいけないのか全然判らない。

美月様は気分屋だから困る。

前に迷宮探検をしろって云われて迷宮に潜って敵を倒したらどうして敵を殺すんだと怒られた。

迷宮に入って敵を殺さないなんてありえない。

怒られただけじゃなくて腕まで折られた。

本当に美月様は気分屋だ。

振り回される身は辛い。

そもそもずっと衛兵をやっているんだからこんな新兵訓練なんて意味がない。

「整列」「気をつけ」の号令がかかる。

僕は完璧、周りにはだめだめ。二匹まともなのがいると思ったら、片方は志狼だった。

軍曹が一人一人いちゃもんをつけていく。でも云っていることはその通りだ。

そのいちゃもんも僕の二匹前で終わり。

「この中で人になりそうなのは四人だけ他は人以下だ。クズにもなれない」  
四人というのは僕と志狼と赤毛とあと誰だろう。

「四人もまだまだクズだ。安心しろ、この百日間で俺が全員一人前の男にしてやる」

男だって。メスも何匹いるのにもあれもオスになるって事かな。

「ほう、自分は一人前だと思っている勘違い野郎がいるようだな。俺が本物の一人前を見せてやる俺に勝てると思う奴は前に出てこい」

僕は勝てると思うけど美月様にメッセージ以外のスキルや魔法の使用を禁止されているから人物鑑定ができない。

だから確信は持てない。曖昧のまま戦うのは危険だからここはちょっと黙って様子を見ることにする。

でかいだけの莫迦が出てきた。いくら軍曹が小柄だからって体の大きさだけで勝てる訳ない。

やっぱり秒殺だ。周りは何が起こったのか判らないようだ。

僕の目には力任せの莫迦が前に出たとき、軍曹がバツと身を翻したのが見えた。

そしてそのまま払腰で倒し、手刀を首にあてていた。

軍曹は息一つ切れていいない。

「他にいないか」

僕はチラッと赤毛を見る。赤毛は動こうとしない。

「おいお前、何をキョロキョロしている。他人を気にするな。自分が勝てると思っているのなら前に出る」

軍曹が僕を見ていた。仕方なく前に出る。

さっきも手加減していたから、きつと殺されはしないだろう。

「勝負は時の運もあるから毎回は勝てない。でも十回、戦ったら何回か勝てる」

「小僧が云うな」

さっき見た感じだと十回戦って僕が七八回勝つ。軍曹が勝つのは一回くらい。あとは引き分け。

「得物は何だ」

「槍」

「よし槍を二本持って用意させよう」

「あ、今回は徒手空拳で」

「何故だ」

「死にたくないから」

「臆病者め」

美月様に死ぬなど云われた。なるべく殺すなども云われた。全力を出せば死ぬことはないけど、全力の七割しか出すなども云われているから、手加減も難しい。

「よし、来い」

柔術を使う相手にこっちから仕掛けるほど莫迦だと思っているのだろうか。

さっきの軍曹の動きからすると軍曹は右利き。

確認のため左右に動いてみる。右利きのフリと云うか普通にして右へ、そして左へ。左利きのフリをして左へ、そして右へ。

左利きのフリをした時、軍曹の顔がゆがんだから左利きが苦手なのかも。

僕は右利きだけどここでは左利きで通してみようかな。

組み合わせずに右に回り込み続ける。

ずっと挑発していた軍曹も黙る。

外野のヤジがうるさくなってきた。

ヤジを無視して軍曹の音に集中しないと。

軍曹がチラッと横を見る。

何の罫だろうか。

回りながら見た方向を軍曹の背後に持ってくる。

中尉だ。中尉に何か合図してたんだ。

ここで軍曹が初めて動く。

左利きのフリをしているから、いつもより余裕がない。

美月様に云われている七割の全ての力を使って対応しないといけないかも。

軍曹は柔術使い。どの流派かは判らないけど。

組み合わせる関節技を極められたら嫌だ。あれは痛い。美月様に腕を折られたときも関節技だった。

軍曹の右へ右へと回りこんでいたけど、一瞬の隙をつかれて襟首を掴まれちゃった。

思ったより軍曹って腕が長いんだ

振りほどこうとするけど強く握られててなかなか振りほどけない。

踏ん張っていた足の力を急に抜いて後ろに投げ出す。

そうすると当然うつ伏せの状態で倒れ込む。

軍曹も前かがみになる。

ベタツと倒れるのは嫌だから右手を地面につく。

で、右手で地面を押すのと同時に左手で襟首を掴んでいる軍曹の腕をかち

上げる。

かち上げられた軍曹はその勢いを殺そうとしたのか空中に飛び上がる。

僕は前に飛ぶ。

軍曹は握っていた襟を離し、空中で反転する。

僕も反転して四足で構える。

あ、つい右手で地面を搔いちゃった。

ここでは左利き。それを忘れないようにしなくっちゃ。それに殺気もちょっと漏れちゃったかも。

うーん。相手を殺さず、自分も死なず、勝つにはどうしたらいいかな。作戦

を考えなくっちゃ。

いつもは槍を使っているからなあ。

槍を使つてない時は四足で相手の懐に潜り込んで足の付け根の急所を爪で

切り裂くんだけれど、殺しちゃいけないって云われてるからそれはできない。殺さないんだったら、やっぱり頸動脈を絞めて落とすしかないかな。

よし。

飛び上がって左手を振り上げる。

軍曹の左側頭部めがけて腕を振り下ろす。

避けられるのは想定済み。

軍曹はおそらく右に避けるだろう。

そしたら着地して背後から首を極める。

その作戦で行こう。

避けなかったらそのまま側頭部を殴って脳震盪を起こさせればいい。

左手をはねのけられたら空中で身をひねって顔に裏拳かな。

身をかがめてやりすごされても背後からの首絞めは変わらず。

身をかがめてやり過ごしながら足を取られちゃったらそのまま前転して軍

曹を地面に叩きつけて押さえ込みかな。

僕は左手を振り上げながら飛び上がった。

軍曹は右に避ける。よし、想定通り。

着地。

反転。

あ、軍曹も反転したから背後は取れない。

バックステップで距離を開ける。

軍曹は左肩が痛そう。

それは僕がそれ違いざまに蹴っ飛ばしたから。それが効いてるのかも。

で、背後を取れなかったから首絞めはできない。

これからどうしよう。

もう一度同じ作戦で行くか、懷作戦に切り替えるか。

で、考えていたら、軍曹から殺気が。

とりあえず右へ回り込み続ける。

軍曹はまた襟をつかもうとする。

同じ失敗は何回もしたくないから、隙を見せずに避けまくる。

ずっと避けてるけど、余裕はなくなってきた。

それは軍曹も本気を出し始めたってことだろう。

七割じゃなくて全力だったら左利きのフリしても余裕なんだけどなあ。

あれ、どうして左利きのフリしなくちゃいけないんだっけ。

それも美月様に云われたんだっけ。

もう、面倒だから「まいった」しちゃおうかな。

よし、次の作戦がダメだったら「まいった」しちゃおう。

次は懷作戦だ。

でも急所を切り裂くのはダメだから、懷に潜り込んでみぞおちにアッパー

パンチしよう。

あそこを殴られると一瞬息が止まるからその隙に腕か首が取れるところを  
とって極めちゃおう。

まずは四足。今度はちゃんと左手で地面を掻いた。唸ってみると効果的かな。

「うおん」

地を走る。

あ、軍曹の構えが変。

あれは掌から風魔法を出そうとしてるみたい。

加速して魔法が発動する前に倒さなきゃ。

あああ、全力が出せたらなあ。せめて右で戦えたら。

え？ 三本目の手？

急に三本目の手が出てきて、軍曹の風魔法を出そうとしている手を掴む。

そして、四本目の手が軍曹の腹に向かって伸びていた僕の腕を押し下げる。

四本目の手はそのまま僕の喉に向かって伸びてくる。

三本目の手、四本目の手の持ち主は。中尉だ。

このままだと喉が潰される。よけなきゃ。

七割の力じゃ間に合わない。

失敗だ。美月様から複数の敵からの攻撃に注意しろと云われていたのに油

断した。

〔中尉サイド〕

少将がいきなり訪ねてきたのが三日前。

少将が来るのは『貴族のご子息』が入隊するときと相場が決まっている。少将レベルとなるとそれも下っ端の貴族ではなく、それなりの爵位だ。

何某伯の三男が入隊するから便宜を図れ。そういうことだ。

獅子將軍の次男が入隊したときも少将が来た

だが、そのときは徹底的に鍛えてくれたった。

軍といえども経費はかかる。いや、軍ほど経費のかかるものはないだろう。

となれば、主たるスポンサーの貴族の意向を無視することはできない。

だから便宜は図る。ただそれは、十日後からだ。それまではみな同じに扱う。

それに同意しなければ入隊はさせない。

入隊後最初の十日間で兵士の基本を叩き込む。兵士として、軍人として必要な最低限のことをこの十日間で教えるのだ。

その間は一切の妥協はしない。

みな平等に扱う……訳ではない。逆に手加減要望には厳しく当たる。

基礎訓練の十日の間に自主除隊していくように仕向けるのだ。

もし、その十日間を乗り越えたとしても、肉体的には手加減して、精神的に追い詰める。

そもそも、手加減を要請するような輩には軍人は務まらない。

兵士として戦場に行かせてもいいけない。

間違っても隊を指揮させるようなことがあってはならない。

今回の要望はかわっていた。

一つ、独自の犬票の常時携帯を許可してくれ。

二つ、就寝時間中に活動することを許可してくれ。

三つ、他の訓練所への転籍はしないでくれ。

他は他の新兵と同様に扱ってくれ。

犬票は形状が一般的な軍票と同じようなものなら問題ないだろう。

装飾性の高いものなら、装飾品は「指輪も外せ」と云っている手前面倒だ。

睡眠時間を削るのは本人のために勧めない。

訓練期間中はいかに睡眠時間を確保するかが課題の一つになっているくらいだ。

それに夜間緊急訓練もある。

緊急訓練でみんなを叩き起こした時「どこかに行っていた」では困る。

転籍は自分の裁量でほぼどうにかできる。

兵の訓練所は複数ある。ここが最大の訓練所だ。そして新兵の全員がここスタートをきる。

ここでの十日間の基礎訓練を終えると適正によって別の訓練所へ転籍させる場合がある。

五十人に一人いる魔法素質を持った者は魔法訓練所へ移る。

新兵ではあるがすてにある程度の戦闘技術を持ったものはより高度な訓練所にまわす。

人間性に問題があるクズはゴミ箱と呼ばれる更生訓練所へ捨てる。

ここに残るのは「使い捨て」の一般兵か、将来の指揮官候補だ。

ここから動かすというのは指揮官候補として扱えということか。

魔法素質保持者については、決定権は魔法隊にある。

こちらからの推薦がほとんどだが、魔法隊が欲しがればそれを渡すのは不文律だ。

入隊者は魔法素質を持っているが魔法隊からの転属要求を拒否しろというのか。

であればそれは少将から魔法隊に話をつけてもらわなければならない。

指揮官候補か魔法素質か。真意はなんだ。

一度本人と話したいと少将に告げる。

なにが不満か聞かれ、装飾と睡眠時間と魔法素質の懸念点を答える。

「では本人ではなく雇い主と会うべきだな」と少将が告げる。

雇い主とは何か。保護者のことか。

少将は「今回の入隊者は客人の依頼だ。体験入隊の扱いで実際に入隊するのは客人本人ではなくその配下のものだ」と答える。

では入隊する本人と雇い主に会うことができるかと聞く。

「伝える」

そう云って少将は帰ろうとしたが扉の前で立ち止まった。

「相手は客人だから修了しても配属はない」

軍役に就かないものを国の金で教育するのか。それを要求するのか。何たる無礼だ。

結局来たのは入隊当日の朝、入隊受付開始の少し前だった。

「行く」とだけ連絡があり、それきりだったので逃げたと思った。

当日に来るなんて、よほど自信があるのか、よほど無礼なのかのどちらかだ。

当番の訓練兵が執務室に来て来訪を告げる。

ここで会うか応接で会うかと問われ、応接でと答える。

本来ならここでもいいだろう。だが相手は少将をも動かす人物だ。気位が高く面倒な人物かもしれない。

今日は六十日に一度の入隊の日だ。何も知らない新兵の面倒は疲れる。これ以上の面倒は勘弁だ。

もったいぶって時間をかけ応接に移動する。そしてゆっくり扉を開ける。

扉の前の人物を見て疑問符が湧いた。ヒラール中尉？

正面に立っていたのは魔法隊のヒラール中尉だ。

隣にはチュニックとゆるいズボンをはいた男。男の左目には黒い眼帯。二人を挟むように狼人が二体。

眼帯の男はいかにも柄が悪そうだ。

チュニックは略式の軍服だから非礼とは云えないが、こういう場で着るものではないだろう。

雇い主は魔法中尉で、男と狼人の更生によこしたのか。

「中尉が雇い主ですか。それなら少将を通さず直接云ってくれば」

「私は案内役です。入り口で会っただけ。こちらはミツキさん。ミツキさん、こちらが所長のファレル中尉」

「美月です。よろしく」

その声に一瞬止まってしまふ。

女だ。男だと思っていたが眼帯の女だ。

ミヅキと名乗った女は、こちらが握手の手を出す前に、びよこんとお辞儀をする。

知らない者との儀礼的な握手は好きではない。この女もそうなのだろうか。

握手を回避するために素早くお辞儀をしたのだろうか。

「ファレルです」

こちらで一応名乗っておく。

それにしても魔法中尉に案内させる程の女とはいったい何者か。

「ミヅキさんは何をされている方ですか」

「私ですか」

女は怪訝な顔をする。知っていて当然と思っているのか、誰何が不快なのか。

「いえ、ヒラール中尉と親しいようですが、軍事と関わりのある方には見えなかったものですから」

「私は身勝手に好きなことをしています」

「魔法の品を扱っている方ですよ。私とはその縁で何度か」

「ほう。マジックアイテムですか」

盗掘専門の女盗賊か。

少将も魔法中尉も軍に盗賊の手伝いをさせるつもりか。

「マジックアイテムの販売は糊口を凌ぐためにちょっとだけ」

「糊口ね」

「上級品なら一つで数ヶ月暮らせますから。割りがいいので」

「上質なマジックアイテムが残っている遺跡はモンスターも強いですし、出口で漁夫の利を狙う輩も多いですしね。確かに、盗掘するには軍隊並みの

兵力が必要でしょうね」

「遺跡？ 私たちの扱うアイテムは工房で作成したものですよ」

「作った？」

「正確にはマジックアイテムではなくその模造品ですけどね。でも、そんな品でも中尉のおっしゃる通り奪おうとする犯罪者が多くてそれなりの警備が必要になります」

女はちらつと狼人を見る。

「警備ですか」

「強盗や犯罪者、そういう不埒な輩を軍がしっかりと取り締まってくれば、警備なんて必要ないのですがね」

こっちの嫌味に対して、嫌味を返してきやがった。いけすかない女だ。

「相変わらずミヅキさんは手厳しいですね。ですが、街中警備は軍ではなく警備隊の範疇です」

ヒラール中尉め。腰ぎんちゃくに成り下がったか。

「そうでしたか、失礼しました。田舎者故物を知りません。笑い飛ばしてください」

こっちに向かって頭を下げる仕草がわざとらしい。

「で、あまりお時間もないでしょうから、無駄話は失礼ですね。入隊審査を始めてください」

今の話を無駄話といいきるのか。

「志狼、タグ貸して」

女が勝手に話を進める。確かに時間に余裕はない。

魔法中尉の隣の狼人が首からペンダントを外し、女に渡す。女はそれを手のひらにのせ、さし出す。

「派手な装飾はよろしくないとのことでしたので、目立たないよう、こちらの軍票に似せて作りました」

つまみあげてみると、女の云うように軍のタグに似ている。

わが軍のものより一回り小さく、端がやや丸くなっている。

そしてプレートにはどの言葉か判らない文字が刻まれている。

複雑な直線と曲線からなる小さな文字が手彫りとは思えないほどきれいに彫られている。

裏返すと、そこには円の一箇所が輝やいているようなデザインとそれにかぶって『闇面』の文字がある。

これなら問題はないだろう。

装飾品は禁止されているが、恋人の似顔絵を納めたロケットを軍票と一緒に着けている者もいる。

目立つものは注意するが、このタグ程度のものであれば何ら問題はない。

「許可します」

ペンダントを女の手のひらに落とす。女は狼人にむかつて放り投げる。

「睡眠時間の緊急訓練は『兵舎からは離れない』ということでいかがでしょうか」

またしても女が勝手に話を進める。

「ミヅキさんは入隊の経験は」

「私に経験があればこんな面倒くさい真似はしませんよ」

「では判らないでしょう。いかに訓練中は睡眠時間が大事か。それを削るのがどれだけ辛いのか」

「それは大丈夫です」

「入隊するのはミヅキさんではないのですよね。本人に聞かなくてもいいのですか。実際に辛い思いをするのは本人ですよ」

「だってさ、どうなの。次狼、志狼」

狼人たちは短く「大丈夫」「問題ない」と返す。

まるで唸っているような話し方だ。

「いいというならこちらは構いません。でも、夜に何をしますか」

「こちらへの報告：報告書の作成と鍛練ですかね」

「報告？ スパイして敵国に情報を渡すのですか」

「国家秘密になるような、そんな重大な内容の訓練をしていただけなのですか。それは楽しみです」

つくづく嫌味な奴だ。新兵相手に国家レベルの重要事項を教えるはずない。



「私たちの目的は警備の強化ですから、警備に役立つことはすぐさま真似させていただきます」

「そちらが、構わないというなら、就寝時間後の活動も認めましょう。ただし、寝不足になって翌日に響いてもこちらは手加減はしません。また、他の兵の迷惑になる場合はやめてもらいます」

「ありがとうございます。では入隊審査は合格でよろしいですね」

「待ってください。そちらからの条件は三つあったはず」

「あ、転籍なしの件ですね。それに何かまずい点がありますか」

「魔法素質を持った者は魔法隊が転籍権を持ちます。魔法中尉が転籍要望を出せば私に拒否権はありません」

「次狼、志狼に魔法の資質があるとは思えないから大丈夫でしょう。万が一あったとしても、ヒール中尉、そのときでもここに残すようお願いします」

「魔法隊の訓練所に来ていただけなのです。それは残念です」

「魔法中尉がそうおっしゃるなら、それも問題ありませんね。他に条件は」

「いえ。あ、入隊式の様子、見るができますか」

「賓客として観兵させろということか。」

「わが軍は開かれた軍をモットーとしています。堀の隙間から訓練場が見えるようになっていきます」

「ではそちらで拝見させていただきます。これからよろしくお願いいたします」

「特別扱いはしません。彼らは他の新兵と同じように扱います」

「それは願ったりかなったりでです」

女はふてぶてしく微笑む。

「訓練が辛すぎて途中で逃げられても、それはこちらでは責任を負いかねます」

女が声を出して笑う。

「私もそうならないことを願っています。では、こんどこそ合格ですね」

「そういうことにしましょう」

「ではさっそく入隊手続きをさせていただきます」

女が応接室から出ていこうとする。

ヒール中尉も一緒に退出するようなそぶりを見せるが、それに対し、目で見残るように合図する。ヒール中尉は小さくうなづく。

「私はファレル中尉ともう少し話がありますので」

「当番兵、お客様はお帰りだ。迷わないように門まで送って差し上げろ」

当番兵がハイと返事をし、扉を開ける。

当番兵を先頭に、狼人に挟まれて女が出ていく。

扉が閉まる直前「忘れてた。すぐ戻すから、ここで待って」と女の声が出て再び女が入ってくる。そして後ろ手で扉を閉める女。

どこから取り出したのか、体の前に残った手には木箱が乗せられている。

「ファレル中尉。今回の御配慮のお礼です」

女が箱を押し付ける。

「工房で作った模造品です。私の故郷では十手と呼ばれる短棒です」

「ジッテ？」

「これからの分のお礼は効果に応じてまた今度ということ」

女はこちらが何か云い返す前に頭を下げて出ていく。

魔法中尉を見る。魔法中尉は肩をすくめる。

「どういう女なんだ」

「紹介の通りです。魔法の品の商人」

「盗賊か」

「正体を探れと云われています」

「ほう。誰から？」

「直接は少将から。おそらくは真の指示者のもと上のところでしょう」

「少将の上といったら」

「名前を出さないでください。どこに耳があるか判りません」

「そうだな。余計な敵は増やしたくないしな」

「初めて名前を聞いたのは魔法省の連中からです。その後、二回ほど話す機会があつて、今日が三回目です」

「三回目の割には親しそうだったな」

「私も、同じようなものを貰いました」

魔法中尉が木箱を示す。

「私のは櫛のワンドでした」

木箱を開ける。中からはオレンジの布に包まれた金属製の短い棒が現れる。

持ち手部分の房はオレンジの紐が巻かれている。その紐は中指ほどの長さが房からぶら下がっている。

金属棒で長さは前腕ほど。取っ手の先に鉤状の突起がついている。

全体がオレンジがかって見えるが、それは布と房の色が反射しているのだろう。

「中尉は私が本当は何になりたかったか知ってますよね」

ヒラール中尉は魔法訓練所で一期後輩だった。野外合同訓練で同じ小隊だったとき話をしたことがある。

「ヒーラーだったか」

「ヒーラー。そう確かに云いましたよね」

「そうだったろ。ヒラールだからヒーラーかって誰それに茶化されていただろ」

「その話をしたのはあのメンバーだけ。あの時だけです。他ではしていません」

「それで？」

「ワンドの本来の使い道は知っていますよね」

今は魔法補助として使われるが、それは本来の使い方ではなく、魔法発動が本来の使い方だ。ただ、魔法を発動できるワンドは希少で高価だ。

「ヒールの魔法が発動したか」

「いいえ。そう見えたのですが違いました」

「残念だったな」

「いえ、興奮してここしばらく眠れません」

こいつのもったいぶった云い方が昔から嫌いだ。

「魔法省に渡して調べてもらわなければいけないのでしょう。でも渡したくない」

「？」

「本当になりたかったのはヒーラーでなくキュア使い」

「失われた治癒士か」

「ワンドは極低レベルですが、キュアを発動できます」

「古代のアーティファクトか」

「私がキュア復活の研究をしていることは誰も知らない。なのになぜ」

十手を見る。

「先ほど聞いたらワンドは工房で作った模造品と云ってました」

「これと同じってことか」

十手を手に取って振る。軽い。よく見るとオリハルコン製の。

「これを模造品というのか。いけすかない女だ」

〔次狼サイド〕

インペの中身は全部置いて行けて云われてたから、強制帰還アイテムもない。

喉を突かれるのはよけきれないとして、首を落とされるのはだめだ。

首を落とされたら死んじゃう。

中尉の手が横に動いて首をかき切る前に後ろに下がらなくっちゃ。

中尉を蹴飛ばしてバックステップ。そしてバック宙。

両ひざと右手を地面について左手で喉を押さえる。

あれ？ ケガしてないぞ。

中尉と軍曹がにらみつけてる。二人して僕をいたぶる気なのかな。二人相手

だとやられちゃう確率が高い。

「ごめんなさい。まけました」

ここは負け宣言して終わらせちゃおう。

軍曹はまだにらみつけてる。

「殺さないで」

軍曹と中尉が顔を見合わせてる。きつとメッセージで内緒話をしているんだ。

話が終わったのか軍曹と中尉が離れた。

中尉は元いた場所へ戻って、軍曹は服をはたく。

「ここは練兵場でコロシムじゃない。簡単に殺しはしない」

軍曹が冷静に戻って冷たく云い放つ。

「立って列に戻れ」

僕は手の土を払いながら列に戻る。

「お前らは今日から兵士だ。ごろつきとは違う。兵士としての戦い方、行動、考えをすべて叩き込んでやる」

ええっ。なんて優しいんだろう。

美月様に眷属として呼び出されたときは、ただ一言「衛兵をやれ」だった。

衛兵がどんなものか、何をしたらいいのか、一切教えてもらえなかった。

自分で調べて、一緒に呼び出された太狼に聞いて、謁見室で壁の前に立った。

その後も、「何をしろ」「かにをしろ」って云われたけどどうしたらいいかは教えてくれなかった。

それなのに軍曹はどうすればいいか教えてくれるって。なんていい人なんだ。

そもそも呼び出される前に眷属の役目は一日限りって長老に聞いてたけど、何日たってもお役御免にならない。

長老に嘘つかれた。

「今日から百日間、俺の云うことは絶対だ。疑問を持つな。俺に従え。いいな」

そんな当たり前のことを云って軍曹が周りを見まわす。

「返事は」

「はい、軍曹」

僕はすぐさま返事をする。それに付られて周りの何匹かも返事をする。

「声が小さい！ 返事は『イエッサー』だ」

「イエッサーー！」

半分ぐらいが返事を返す。

「何故全員が返事をしない。返事は全員そろって『イエッサー』だ。返事をしなかった奴がいた懲罰として、全員グラウンド十周」

とどこどこで「えっ」「無理」の声が漏れる。

「返事は全員そろって『イエッサー』だ」

「イエッサー」

「左向け、左」

軍曹の横にいたオーガが突然大声を出す

「隊列のまま俺についてこい。遅れるな」

そう云って走り出す。みんなばらばらとオーガについていった。

グラウンド周囲ジョギングのあとは、あっち向け、こっち向けの号令の繰り返し。

それが終わったただただ行進。

最後にまたグラウンドを五周、周囲。

これようやく準備運動が終わったのかと思ったら、今日の訓練はこれで終わりだって。

周りを見るとみんなへたり込んでる。

行進の途中やジョギングの途中で列を離れるのが結構いたから、これでも人間種にはつらいのかな。

訓練の終わりに軍曹がみんなの前で訓告する。

「訓練についてこれないやつはすぐに申し出る。いつでもいい。遠慮する」

な。日割りで給料を払ってやる。ただ、何も云わずに立ち去るな。それは逃亡だ。軍からの逃亡は重罪だ。逃亡者は必ず見つけ出す。そして殺す」

でもこれしきのこととでやる奴なんかいのか。って思ってたんだけど。グラウンド訓練の後の班分けの時「やめます」って云いだすのがいた。人間種だけじゃなく中には亜人種も何匹かいてびっくりだ。

僕はやめられないんだろうな。美月様にここに行けって云われたから。ま、この程度だったらやめることもないけど。

班分けの時に教えてもらった兵舎にいくと、そこは兵舎って云うより倉庫だった。

ただの倉庫の中に二段ベッドが二列に十五個ずつ並んでいる。キョロキョロしていたら小柄なドワーフが名前を聞いてきた。

「次狼」

「オレへの返答には『軍曹』をつけろ」

このドワーフも軍曹らしい。

「次狼です。軍曹」

「貴様はここ。右側一番手前の下のベッドだ」

云われたベッドをのぞき込む。

シャツとパンツと靴下が二枚ずつ。タオルが一枚。迷彩の軍服上下が二着。

軍靴が一足。巾着袋が一つ。

隣のベッドを見ると、巾着以外は同じで、巾着の代わりに大きなずた袋。立ち上がって上のベッドを見ると巾着の代わりにカバン。

どうやらずた袋やカバンは来るときに持ってきた個人の荷物らしい。僕は何も持ってこなかったから巾着なのかな。

巾着を開けてみる。中には硬貨が数枚。それと手紙。

『必要なものがあつたらこのお金を使って購買で買いなさい。美月』  
いったい何が必要なんだろう。

美月様のことだから間違つたものを買うと文句を云うんだろうな。何も買わないのが正解かも。それとも何か買うのが正解なのかな。

そんなことを考えている間にも兵舎に新兵たちが入ってきてドワーフに「軍曹をつけろ」とどなられている。

毎回同じこと怒鳴るんだつたら、兵舎の前に張り紙でもしておけばいいのに。

僕の上のベッドは背の高い細身の人間種だった。

そいつは「よろしくな」と云って僕を睨みつけた。

みんな今日が初めての軍体験で緊張してる。でもこいつは明らかに場慣れしている。

この男が人になれそうな四人目なのかな。

でも、軍曹が「人になれそうなのは四人だけ」って云ったときは、こいつ、いなかった。

最後のグラウンドジョギングのときにはいた。

行進の時はどうだったかな。  
でも最初のグラウンドジョギングにはいなかった。

あとで志狼にも確認してみよう。

細身の男が最後だったらしく、軍曹が外に向かって吠える。

外からオークと知らない種類の妖精族っぽい亜人が入ってきて、誰もいないベッドの上の荷物をまとめて運び出していく。

きつとやめてった連中の荷物なんだろう。

「オレが今日からこの兵舎をしきるギドだ。ギド軍曹と呼べ。いいか」

「イエッサー」にまじって「はい。ギド軍曹」の返事が聞こえる。

「ここでの生活について質問や話があるときはまずオレにしろ。ただし、下らん話や質問はするな。いいか」

「イエッサー」

「よし。あと少しで飯だ。今日は特別に俺が食堂まで案内してやる。身支度をしたら兵舎前に全員集合しろ。いいか」

「イエッサー」に遅れて「あの、疲れて何も食べたくありません」の弱い声が聞こえる。

ドワーフは声がした方を睨み、歩いていく。

「今の発言は誰だ」

ベッドの柱に手をかけ、かろうじて立っていた人間種の男がキョロキョロしだす。

周りはドワーフとその男を交互に見ている。

男は観念したように右手を上げる。

「僕です」

「貴様が腹一杯で飯が食えないと云うやつは。腹ごなしにグラウンド十周させてやろうか」

「あ、大丈夫です。：ギド軍曹」

「ならよし」

ドワーフは両手を腰に当て兵舎内を見まわす。

「オレは云ったはずだ。くだらん質問はするな。そしてオレはこう命じた『全員集合しろ』と。『全員』は全員だ。食事も訓練の一部だ。貴様は訓練をさぼるつもりか」

「いえ、食事訓練に喜んで参加します。ギド軍曹」

「判ったようだな。いいか貴様ら。オレの命令は絶対だ。くだらない質問はするな。本来ならくだらん質問をした罪の共同責任で全員がグラウンド十周だが、今日オレは気分がいい。今回は特別に勘弁してやる。ありがたく思え」

一部が「イエッサー」と答える。

「よし、オレは一休憩してくる。俺が戻ってきたら全員兵舎前に集合しろ。それまでは自由にして構わない。判ったか」

「イエッサー」

ドワーフは入り口、すなわち僕の前まで戻ってくる。そして、兵舎内をぐるりと見渡すと外へ出ていった。

ドワーフが出ていくと張りつめていた空気が急に溶けていく。

ほとんどの者がベッドに倒れ込む。

僕はグラウンドを走る方がよかったんだけど、みんなは違うみたいだ。

「足側の引き出し、使わせてくれ」

急に声をかけられて上を向くと、上のベッドの男が僕の前に立って僕を見下ろしている

「引き出し？」

男はかがんで僕のベッドの下の引き出しを少し開ける。

僕が横によけると引き出しをぐっと引きあげ、中に軍服一式を放り込む。

そして、今着ているシャツとズボンを脱ぎ、それも引き出しの中に入れる。

ついている筋肉は鍛えられた筋肉だ。

男はベッドの上に残ったもう一組の軍服を着こむ。

なるほど、食堂に行く前には着替えるものらしい。僕もチュニックを脱いで軍服に着替えよう。

向かいのベッドの二匹と、横のベッドの一匹も、僕たち二匹が着替えるのを見て真似し始めた。

僕みたいな獣人にはボタンの服は面倒くさい。それに左手で着ようとする

とさらに大変。どうしてスボット入るチュニックにしないんだろう。

僕がやっとの思いで軍服を着ると、それを待っていたように上のベッドの男が話しかけてきた。

「オレはローベル。よろしくな」

「次狼です。ローベル軍曹」

ローベルの顔が一瞬歪むけど、すぐにニタニタ笑う。

「俺は軍曹じゃないぞ。同じ新兵だ。タメ口にしてくれ」

その後、握手しただけに手を出しそうだったので、こっちらびよこんとお辞儀をして、握手を阻止した。

「よろしく、ローベル」

「いやあ、でも強いな、ジロ。ジア軍曹との闘い。すごかったな」

ジア軍曹って誰だ。闘いって云ったからあの軍曹のことかな。

「でも、なんで手加減したんだ。余裕で勝てただろ」

最後は七割全部の力を出してたし、余裕はなかった。

周りにも余裕があるようには見えなかったはずだ。

なのに『余裕で勝てた』ってなに。

僕はローベルを見た。

とたんに判った。

ローベルは僕と軍曹の戦いを見てない。話に聞いたただけだ。やっぱ、ローベルは最初のグラウンドジョギングの時はいなかったんだ。

それと、ここの生活に手慣れた感じ。

あの場にいないくて、僕のベッドの上に配置されて、ここに慣れてて、僕が思

わず『軍曹』って呼んじゃう男って。

中尉のスパイだ。

軍曹と中尉とローベルで僕をやっつけるつもりなんだ。

「手加減なんかしていない」

あの時、中尉の手にナイフがあったら僕は首を切られて死んでいた。

「中尉が止めに入ってくれたんじゃないやなかったら、死んでた」

向かいの小柄な男も興味があるようで、こっちによつて来る。

「もう一度戦えば次は勝てるんじゃないや？ あ、ぼく、ミヒヤ、ミヒヤ・エルよろしく」

相手が軍曹だけだったら十回に七八回は勝てる。

でも軍曹と中尉を相手にしなくちゃいけないなら十回で勝てるのは二回くらい。

さらにそこにローベルが加わると、きつと勝てない。

「無理。勝てない。もう戦わない。死にたくない」

「そうだね。こんなとこで死ねないよね」

「うん」

ここで死ぬのは嫌だ。美月様に死ぬなと云われてるから。

死んだら後で何されるか判らない。

想像するだけでも恐ろしい。

「ローベルにも云ったけど、中尉が止めてくれなければ死んでた」

「すごかったね。中尉。何があったの。見てたけど判らなかつたよ」

「判らない。気づいたら目の前にいた。ローベルは中尉の動き、見えた？」嫌がらせ。

ローベルはあの場にいなかったから答えられない。

「ん？ あるとき？ 見えたような見えないような」

やっぱり答えられない。

「あれって、やっぱり魔法かな」

「僕は軍曹しか気にしてなかったから、中尉の動きは判らない」

「ぼくも一緒。軍曹しか見てなかった。でも、あれだけ速く誰にも気づかれずに動くんて、きつと魔法だね」

あれくらいなら魔法を使わなくても動ける。

僕には無理だけど、ギルドの統括連中だったらもつと速い。

でも中尉はそこまでレベルなさそうだったから、魔法かも。

魔法とすると俊敏性を上げる魔法かな。まさか空間移動つてことないよね。

そんな難しい魔法持つてるんだったら、絶対に勝てない。

「中尉は空間魔法使いなんだね」

「まさか、それはないだろ」

僕の言葉をローベルがすかさず否定する。

「そんな大それた魔法が使えるんだったら、こんな訓練所の所長としてくすぶつてる訳ないだろ」

訓練所所長がどの位置づけなのか判らないから、否定も肯定もできない。

「そうだね。空間魔法が使えるなら、魔法省かすくなくても魔法隊にいなね」

「魔法使いはみんな魔法隊？」

「みんなじゃないが、ほとんどは魔法隊だぞ。そんなことも知らないのか」

「うん。でも、魔法を上手に使えないような人は普通の兵士だけだね」



やっぱりローベルは軍隊のことをよく知ってる。ミヒヤもちょっとは知ってるみたい。僕が知らないだけなのかな。それともミヒヤもなにかあるのかな。

魔法が使えたら魔法隊になっちゃうんじゃない、一般兵なんか全然いなくなっちゃう。

「軍曹は風魔法を使えるけど、ここにいてってことは『上手に使えない人』だから？」

「ジア軍曹の風魔法？ だから勝てないって云うのか。魔法使い相手は苦手だったりするの？」

ローベルは一人で納得してる。

あの程度の魔法なら全然怖くない。勝てないのは三対一だから。でもそのことは云わない。少なくともローベルには黙ってる。勘違いしてくれるならそのほうがいい。

「ジアってジロが戦ったあの軍曹の名前？ 軍曹、風魔法使った？ 全然わからなかった」

やっぱりミヒヤもジア軍曹の名前を知らなかった。

たぶん新兵は誰も知らない。知ってるのはローベルだけ。

「ここにいる教官はみんな軍曹？」

僕は思ったことを聞いてみる。ジア軍曹にギド軍曹、ジョギングのオーガも軍曹なのかな。

「全員じゃないけどな。ほとんど軍曹で曹長がちょっとだけ、軍曹候補の伍

長がちらほらだな」

やっぱりローベルはよく知ってる。ミヒヤも「詳しいね」って云ってる。

「ミリタリーおたくだからな。やっと入隊できてうれしいよ」

嘘だ。きつと嘘だ。

でも指摘はしない。

「ところでジロ、そんなに強いなんていままで何してたんだ」

どこが『そんなに強い』なんだ。

どうしても僕を『強い』にしたいらしい。

「そんなに強くない。衛兵をしてたから慣れてるだけ」

「衛兵って、軍人だったの？ それなのになぜ新兵訓練受けるの？」

衛兵は軍人じゃないと思う。

闇面《ダークサイド》は軍じゃないはず。

「軍人じゃない。警備員みたいなもの」

「そうか民間人か」

「ローベルこそ軍人なのになんで訓練？」

「おいおい、何云いだすんだ。俺だって軍人じゃないぞ。冒険者まがいのことをしてただけだ」

「だから二人とも体力があって訓練について行けたんだね」

「ミヒヤもついてきてた」

「ぼくは限界だったよ。あれ以上続いたらぼくもダウンしてたね」

総勢二百五十匹程のなかで最後までオーガについていたのは五十匹ぐらい。

ローベルは途中参加だけど、最後は僕の後ろをずっと走ってた。

ミヒヤは遅れそうになりながらもなんとかついてきてた。

ほとんどは周回遅れ。

地面に転がってへばっていたのが六十匹ぐらい。

ついていけてた五十匹のほとんどは亜人ばかり。

ミヒヤは残った数少ない人間種の一匹。

「ミヒヤはなにやってたんだ」

ローベルが無神経に尋ねる。

「ぼく？　ぼくはちよっとだけ剣術を習っていたから」

「仕事は」

「うーん。生まれた家がいろいろやっているから、その手伝いとか」

「大店のおぼっちゃんか」

「大店じゃないけど。まあ、そんなところ」

答えにくそうにしてるミヒヤの助け舟として話を変える。

「食事はしないとダメ？」

「何でだ」

「食べたくない」

食事をすると糞をしたくなる。面倒だ。

「あの軍曹の話しぶりだとダメだろうね」

「ジロも食いたくないほど疲れてたのか」

「食べなきゃいけないのなら食べる」

「食える時には食っとけ。食いたくても食えないときには食えないからな」  
ローベルは頭が悪いのだろうか。そんな当たり前のことを、偉そうに云うなんて。

どちらにしろ僕が『食べたい』と思うときはないだろうけど。

〔中尉サイド〕

新兵の中にはごくまれに初めから戦闘能力を持った者がいる。冒険者あがりだったり、盗賊だったり。

でもそれは「ごくまれ」だ。

冒険者や盗賊で軍人になったがる者はまずいない。

まだ荒削りの戦闘素質を持った者はままいる。集落の中で一番強かったり、自分が最強だと思ひ込んでいる蛙だったり。

新兵訓練の目的は兵士を育てることだ。

兵として重要なことは戦闘力ではない。規律よく動くことだ。

中途半端に力を持っている者は自らの判断で独自に行動する傾向にある。

軍は規律よく動いてこそ力を発揮する。規律を乱すものがある軍は崩壊してしまう。

兵士にヒーローはいらない。ヒーローは逆に邪魔になる。

新兵訓練の最初の仕事は中途半端な戦闘力を持つ者の鼻をへし折ることだ。

その役目はグラッド軍曹かジア軍曹が適任だ。

二人とも小柄で見た目は強そうに見えない。

だがグラッド軍曹は躰道、ジア軍曹は柔術を得意とする対人戦のスペシャリストだ。

グラッド軍曹は現在すでに一期前の教育隊の任に就いている。

今期の隊はジア軍曹の番だ。

グラッド対ジアではどちらが強いのか。練兵場の中でよく話題になる。

頭に血がのりやすいのはジア。戦闘で冷静さを保てないのは欠点だ。

グラッドは冷静に相手を見て冷静に相手の弱点を突く。

軍曹や曹長の間ではグラッドが有利だが、私はジアを推す。

それはジアには秘密兵器があるからだ。ジアの秘密を知っているのは少数でない。

今回もいつもと同じように入隊式は進む。

力自慢の田舎者が前に出てきて簡単にやつつけられる。

多いときはこのあと二三人名乗りを上げるものが出てくるのだが、今回はいないようだ。

名乗り出ないときは強そうなものを指名することになっている。目標にされたものにはいい迷惑だがそれも運命だ。

ジアは狼人を選んだ。

ジアにも狼人がそれなりに鍛えているのが判ったのだろう。

狼人は要注意の相手だが実力を見たい気持ちもある。

ジアになら任せていいだろう。

そんな気持ちで成り行きを見ていたのだが。

強い。

狼人はそこら辺の井戸に住む蛙ではなかった。

構えを見ると力を抜いているようにも見えるが、それは違う。

隙がない。

自分からは動かず様子を見ている。

獣人は知能が足りず直情的なものが多く、この狼人はそうではない。

右へ左へと移動しジアの手から巧みに逃れていく。

サウスポースタイルのようだが何かがおかしい。

ジアもそれで戸惑っているのか。

そのジアがちらつとこちらを見る。

合図だ。いざという時は助け舟を出してくれとの。

飄々としているがそれほどの相手か。

しびれを切らしたようにジアが動く。

狼人が逃げる。そしてジャンプ。

違和感の原因が判った。

それは足だ。

手はサウスポードが利き足は右だ。そのアンバランスさが違和感となって表れているのだ。

狼人がジアに向かってジャンプする。

ほう、あのジアの肩に蹴りをくらわすか。

ジアが気を放つ。

気を流す柔術使いのジアが気を放つのは、いつもの調子では勝てないときだ。

いつでも止めに入れるよう用意をしておこう。

狼人が吠える。

ジアが気を放つたことにより狼人も本気になったのだろう。

もし今までのが本気でなかったのなら、ジアが危ない。

ジアもそれを感じ取ったらしい。

魔法の構えをする。

だめだ。二人の間に入って止めなければ。

狼人が動く。

急げ！ 速く！

まずジアの手を止める。

ジアの魔法は奥の手だ。新兵相手に簡単にみせていいものではない。

ジアを押さえるのと同時に狼人を止める。

速い。この速さは何だ。

余裕で間に入り込むはずがすでに狼人は攻撃範囲に潜り込み左手でジアを殴ろうとしている。

腕をとることは難しい。

アップー気味の手に対して体重をかけ押し下げるぐらいしかできない。

それでも狼人の力は強く、その腕の上を体が滑っていくと、いきなり体がその支えを失う。

片膝をつくがころうじて無様に倒れることは防ぐ。

こんな体勢の時に二次攻撃を受けたら負けは確実だ。

ジアの魔法を止めなければよかったのか。

いや、とめなくても狼人のスピードはジアの魔法発動を上回っていた。

魔法攻撃が発動する前にジアは攻撃を受けていただろう。

あのいけすかない女のあざ笑う顔がうかぶ。

これほどのものをここに入れる真の目的は何だ。

狼人は離れたところから身を低くしてこちらを狙っている。

どうやってあそこまで離れたのか。と、急に太腿に痛みを感じる。

俺を蹴飛ばしてその反動で身を引いたのか。

人を殺すときは急所を狙う。

腹を刺してもすぐには死なないが、心臓を刺せば簡単に死ぬ。首を切り落とすことも死ぬ。

切り落とせなくても、首の左側を切れば、頭に血が運ばれず死に至る。脳をたたきつぶしても即座に死に至らしめることができる。

軍でも主に頭と首と心臓を急所として教える。そこを守ること、そこを攻撃すること中心に訓練する。

だが軍でも一部の部隊は違う。

死の精鋭部隊、通称死神隊と呼ばれる隊の隊員たちはまず、肩の付け根と足の付け根を狙う。

時間をかけてでも肩や足を攻撃し、機動力を奪う。

そして、相手が動けなくなったところで確実にとどめをさす。

ジアの肩への攻撃。俺の太腿への蹴り。

狼人の攻撃パターンは一般的な攻撃ではない。確実に死に追いやる捕食者のパターンだ。

狼人が唸るように吠える。そして頭を地面に押し付ける。

どうやら命乞いをしているらしい。

何故だ。狼人側が絶対的有利のはずだ。狙いは何だ。何を考えている。

俺は軍曹を見る。

ジアも事情が分からないらしくこちらを見返す。だが、この優位を逃すつもりはないらしい。

冷静になって狼人を列に戻す。

圧倒的有利な状態での敗北宣言。どこまでが女の策略なのか。

頭の中には壁の隙間から見ているだろう女の高笑いが響く。

新兵たちが走り出すと、すぐさまローベルを呼ぶように云いつける。

ローベルは内偵だ。

人が集まれば陰で問題を起こすものも出てくる。

新兵内でのトラブル防止策がローベルだ。

通常の範囲のトラブルなら教官の軍曹たちで事足りる。

根が深い場合や、問題が奥深くに隠れている場合にローベルを使う。

ローベルは新兵の中に入り込んで危険分子を摘んでいく。

非常勤だが入隊日の今日ぐらいは自宅にいるだろう。

とりあえずそのローベルをマンツーマンで狼人に張り付けよう。

{次狼サイド}

ここはいいところだ。ただ鍛練をしてればいい。それもいつものより楽なところじゃない。

そんなんだと体がなまっちゃうから、夜に追加鍛練をしている。

なんといつても日がな一日壁の前でただ立ってるだけなんてことしなくていい。

それになによりこのみんなは優しい。

間違っても、失敗しても、ここの軍曹たちは舌打ちしたり、鼻を鳴らしたりしない。

「莫迦者、ここはこうするんだ」と全部教えてくれる。

そんなにいいところなのはどうしてみんなやめてっちゃうんだろう。

初日五十何匹かいたこの第一兵舎も七日でもう三十四近くまで減っている。

志狼のいる第二兵舎も同じようなものらしい。

こんなにいいところやめていくやつがいない。

ここで面倒なのは食事訓練と睡眠訓練。

睡眠訓練には参加しなくていいって許可貰ってよかった。

美月様もたまにはいいことをしてくれる。

それでも一回「今から夕方までこの場で睡眠訓練だ。三分で寝ろ」と云われたときは訓練に参加しない訳にはいかなかった。

そのときは壁の前で立っているのと同じくらい退屈だった。

だけど、そんな訓練は今迄に一回だけ。毎日じゃないから我慢できる。

毎日二回もある食事訓練はさぼる方法を見つけた。

軍曹に見つかったら叱られるかもしれないけど。

ローベルも「やりたくない訓練をうまくさぼるのも新兵の覚えなさいけないこと」って云ってたから見つかなければ構わないだろう。

ここでの一日はいつも同じことの繰り返し。

朝、ギド軍曹が来てみんなを起こす。

来るのは大抵、日が昇りはじめるころ。たまに日が昇る前のこともあるけど。

どっちのときも僕はギド軍曹に起こされたことはない。

はじめのころは兵舎の前にいる僕を見て怪訝な顔をしてたギド軍曹もこのごろは何とも思わないようだ。

ギド軍曹が来たらそのあとみんなで柔軟体操をしてグラウンドをジョギング。

朝のジョギングは五周の時もあれば、十周の時もある。

ジョギングが終わったら洗濯訓練。

服を洗って、身体も洗わなきゃいけない。

身体を濡らすと、毛が乾くまで時間がかかるから洗いたくないんだけど、病気予防のために洗わなきゃいけないらしい。

服と体を順番に洗うのは面倒だから、服を着たままシャワーを浴びてたら、ミヒヤに白い目で見られた。

洗濯のあとは食事訓練。

初めての時はみんな揃って食堂へ行ったけど、二回目からは洗濯訓練が終わった順に適当に食堂へ行く。

なぜかみんなは洗濯訓練をさっさと切り上げて、いそいで食事訓練に行く。

食事の何が楽しいのだろう。

食事訓練のあとしばらくするとまたギド軍曹がやってくる。

そしてみんなグラウンドへ行く。

みんなで腕立て伏せしたり腹筋したりまたグラウンドを何周か走ったりする。

行進をするときもある。

右左右左って。そんなに何回も云わなくてもどっちが右か左か判るのに。行進じゃなくて号令に合わせて右向いたり左向いたりすることもある。

ここの国の兵士はジョギングするのと行進するのが仕事なんだろうか。

昼間はずっとこんな感じ。

夕方になったらまた洗濯訓練と食事訓練。

夕方の食事訓練は遅くなると暗くなっちゃって小鳥は来てくれない。

小鳥が食べてくれないときは兵舎まで持って帰って兵舎の裏の便所の近くに置いておく。そうすると朝にはなくなっている。

夕方の食事訓練の後はブリーフィングルームで軍曹とか中尉の話を聞く訓練。

聞く訓練のあとは睡眠訓練の時間になるまで自由時間。

自由時間って自由に訓練していい時間のはずなのにほとんどは訓練してない。

訓練しようと志狼を誘ったら「自由時間は美月様に云われたことをする」と云われた。

何のことが判らなかつたから聞いたたら美月様がいろいろ云った中に「周りと仲良くなっているいろいろ観察しろ」というのがあったらしい。

そう云われたのを僕は覚えてなかつたけど、志狼が「云うんだつたらそうなんだろう。」

美月様はいろんなことをいっぱい云うから覚えられない。

死ぬな。

できるだけ殺すな。

一日一回は報告できるときに報告しろ。

この三つだけは絶対忘れるなって云ってたけど他のを忘れても文句を云うんだらうな。

とにかく自由訓練の時間はみんなと仲良くするためにみんなに話しかけて一緒に何かしてる。

一回賭け事に誘われたけど、難しすぎて何が楽しいのか判らなかつた。だから参加しないで見るだけにしてる。

観察っていうのは見ることでだから間違ってるはず。

賭け以外のグループも難しいゲームや難しい話をしてる。

だからそれも参加しないで観察するだけ。時々、それはどういうこと？　って聞くだけ。

ほとんどのグループには参加しないで見るだけだけど、身体を動かしているグループとは一緒に体を動かしている。

一番楽しいのはシャンヤオなんとかっていう槍の訓練をしているグループ。ここでは軍曹が「うん」といわないと本物の槍は使えないから、槍じゃなく

ただの棒を使ってるけど。

このシャンヤオっていう槍の流派はすごく変わっている。

槍なのに、剣みたいに斬る動作がメインなんだって。

槍で斬っても全然効果的じゃないのに。

わざと弱いふうになんて、全体の七割の力しか出さなつて云われてる今の僕みたい。

いくつかの集まりに顔を出しているとあつという間に自由時間は終わっちゃう。

そこからみんなは睡眠訓練。

あんな退屈な訓練、どうしてみんなやりたがるんだろう。

僕と志狼は免除されてるから兵舎の横で木の棒を使って槍の訓練をしてる。準備運動は昼間の訓練で間に合わせて、夜は実戦形式の訓練。

志狼は僕より遅く眷族になったから僕よりちょっとレベルが低い。

僕のが強いから僕が志狼に稽古をつける格好になる。

そうすると僕の訓練時間が減る。

志狼が終わった後も、僕だけで自分のための訓練をすることになる。

そのときはその日のシャンヤオの訓練をもう一度ゆっくりした動作で繰り返したりしてる。

知らない動きを覚えるのはものすごくゆっくり動くのがいいよって夜美風が云ってたからそうしてる。

ゆっくり動いてそれを覚えたら同じ動作で早く動くように訓練するんだって。

美月様への報告はいつでもいいって云ってた割には、一度夜中に報告したときすごく不機嫌だった。

明け方の報告はそんなに機嫌悪そうじゃなかったから、それからは明け方にしてる。

明け方まではシャンヤオの自主訓練と槍の型の訓練で時間をつぶすから退屈しない。

自分の訓練をしない志狼はきつと退屈だ。かわいそうな志狼。いつも美月様への報告が終わってしばらくするとギド軍曹が来る。

一回、報告の前にギド軍曹が来たことがあった。

だから食事訓練の後に簡単な報告をした。そのときも美月様は不機嫌だった。

報告はいつでもいいって云ってたのに。

本当に美月様は気分屋で困る。

これが僕のここでの一日。毎日がこんな感じ。

そんなのが八日間続いた。

八日目からはちょっと変化があって、八日目の夜は夜通し夜間訓練。九日目は一日中裏山での訓練。十日目は脱走兵の確保と処刑。

で、一区切りらしい。

十一日目からが本番なんだって。

これでやっと本当の訓練ができるらしい。うれしい。

### ●食事訓練

みんなは急いで食堂に行くけど、僕はちょっとゆっくり食堂へ行く。それは食事訓練をさぼるための作戦。

食堂に行くときと入り口で強制的に大きなパンとトレイを渡される。混んでいるときはここで行列に並ぶことになる。

行列の先には、スープと肉料理と野菜料理の皿がずらっと並んでいる。みんな、それを一つ一つトレイに乗せる。



その後は空いてる席について、トレイに取ったものとパンを全部たべなきゃいけない。

僕と同じ第一兵舎に体の大きい人間種がいる。

そいつはいつも腹をすかせている。

こいつの他にも何匹かいつも腹をすかせてる奴はいるんだけど、こいつが一番ひどい。それは貧乏だからだって。

他の腹減りたちは購買で食べ物を買っているらしい。

食べ物を買うなんて、なんでもつたいたいことをするんだろう。それともそんなもつたいたいことをするのが正解なんだろうか。購買で食べ物を買わないとあとで美月様に怒られるのだろうか。

とにかく体の大きい人間種、たしかゴドンって名前のオスは腹が減っても貧乏だから購買で何も買えずにいつも腹を減らしている。

僕は食べたくない。

ゴドンは食べたい。

なら僕のパンをゴドンにあげればいい。

「僕は食べたくないからあげる。食べて」

そう云ってパンをゴドンに放ったらゴドンはびっくりした顔で僕とパンを見てた。

「君の分がなくなっちゃう」

「いらぬい。食べて」

ゴドンがパンを見る。

「君のがなくなっちゃう。全部はもらえない」

僕は一切食べたくない。でもこのままじゃゴドンは受け取ってくれない。だからゴドンの前のパンを取り上げる。

ゴドンは物欲しそうにパンの行方を追う。

僕はパンを二つにちぎる。片っぱが大きくて片っぱが小さい。小さい方を手に取ったまま大きい方をゴドンに放る。

「食べて」

ゴドンがまた僕とパンを見る。

今度はゴドンがなにか云う前に僕は歩き出した。

そんなことがあった後は、ずっとゴドンにパンのほとんどを食べてもらってる。

パン以外の皿はすぐになんとかなくなった。

パンは入り口で強制的に渡されるけど他の皿は違う。自分で取る。

パンを買ったら列から離れて、皿を取らなければならない。

トレイを返却口に戻す。

その後は残ったパンのかけらをもつてすでに食べ終わってる同兵舎の奴に話しかけたい。

うまくするとそいつが残ったパンも食べてくれる。

パンを食べてくれるやつがいなくて残っちゃったら、前は持って帰ってベツドの下の引き出しに入れていた。

今は食堂の外で小さくちぎって撒いてる。

パンを撒いてると小さな鳥が寄ってきて全部食べてくれる。

昨日もそうしてたらそれを見たミヒヤが寄ってきて「優しいね」って云ってきた。

そんなこと思ってたけど、よくよく考えたらそうかもしれない。

僕にかわってパンを食べてくれるなんてなんて優しい鳥たちなんだろう。

だから鳥に向かって「ありがとう」って云った。

そしたらミヒヤも嬉しそうにしていたけど、あれは何でだろう。

食事訓練のさばり方はそんな感じ。

### ●話を聞く訓練

これはものすごく簡単な訓練。

目を開けて話を聞いていればいい。

それなのにいつも誰かしら目をつむって話を聞いて、軍曹に叩かれている。

ミヒヤや他の何匹かはしきりに紙に何か書いている。

目を開けて座って話を聞いていれば、字を書くのはしていいみたいだ。

僕もミヒヤのまねをして、話を聞く訓練の時間は美月様への報告をまとめる時間にしようかな。

でも、紙もペンももってない。

ミヒヤに云うと分けてもらえるかな。

紙とペンじゃなくて小さな濃緑の板に白いチョークで何か書いているオス

もいる。

チョークは購買で見た気がする。グリーンフィングルームの論台の黒い板の前にも置いてある。

どっちもみんなが手に取れるところにあるけど勝手に持ってっちゃいけない。

あのオスも購買で買ったんだろう。購買に紙も売ってるのかな。

そんなことを思いながらチョークのオスとミヒヤを見ていたら聞く訓練が終わると同時にギド軍曹に呼び出された。

「貴様は同性愛者か」

何を云ってるのか判らなかったから聞き返したら、僕の交尾相手はオスかと聞いているらしい。

ギド軍曹は頭が悪いのだろうか。オス同士で交尾をしたって繁殖しない。

だから僕はオスと交尾をしたこともないしする気もない。

そう答えたら、何故ミヒヤとタオをちらちら見てたのか尋ねてきた。

タオってあのチョークのオスのことかな。

「紙とペンか板とチョークがほしいのです。ギド軍曹」

軍曹は急に憐れむような眼で僕を見る。

「金がないのか。それで物欲しそうに見てたのか」

「金があります。でも、紙は購買で買うべきものか判りません。ギド軍曹」

「紙みたいな高価なものは勧められないな。だが、黒板は悪くない買い物だ」

ギド軍曹がそういうなら、板とチョークを買っても美月様は文句を云わな

いだろう。

「では次の食事訓練の時に買います。提言ありがとうございます。ギド軍曹」

僕がそう云うと急に軍曹は僕から興味を失ったみたいで、兵舎に戻れと云い出した。

呼び出しといてすぐに戻れだなんて、ギド軍曹も美月様みたいに気分屋だったんだ。

### ●総合格闘技グループ

身体を動かすグループはシャンヤオの他にもある。

ほとんどのグループは兵舎毎に分かれてるんだけど、身体を動かすグループはそうじゃない。

シャンヤオも総合格闘技のグループもいろんな兵舎が混じってる。

シャンヤオは第一兵舎が一匹、第二と第三が二匹、第四が一匹の全部で六匹。

総合格闘技は初めは第一兵舎だけに見えたんだけど、第三兵舎から参加してるのもいた。

それに第一兵舎しか集まっていなかったときは体を動かすグループだと思っていなかった。

そしたら急に第三兵舎のメンバーが来て、便所の裏で、素手のなんでもありの総合格闘技訓練を始めた。

一対一で戦うんじゃないくて誰でも相手にしていいし、途中で相手を変えてもいいみたい。

この訓練、みんな真剣にやってる。

殴る、蹴る、関節技、頭突き、なんでもあり。すごく楽しそう。

だから僕も飛び入りで参加させてもらった。

みんな殴って、殴られて、蹴って、蹴られて。引きづり倒して馬乗りで殴って。

僕は避けるから殴られることも蹴られることもないけど、ちょっとは殴られたほうがいいのかな。

そんなことを考えながら殴っていたら、みんなは寝転がったまま動かなくなかった。

残っているのは第一兵舎のヒドーと第三兵舎のオークと僕。

オークが僕とヒドーを同時に攻撃してくる。

なんでこの状態で二対一で戦おうなんて思ったんだろう。僕とヒドーのこどと甘く見てるのかな。

今までの戦いを見てもこの中で一番強いのは僕。ヒドーとオークは同じくらい強い。

僕とヒドーを相手にしたらオークは絶対に勝てないのに。

僕はずっと前に出て、さっと横によける。

そしてちょうどオークとヒドーの間にポジションをとる。

どっちからも攻撃を受けるけど、どっちも攻撃できるポジション。

どちらかの後ろを取って先にそいつをやっつけるのも手だけど、急に振り返られて二匹で共同戦線張られたらヤダ。

三すくみになるように徐々にポジションを修正して三角形にする。

オークが僕を攻撃してヒドー側の防御が甘くなる。

ヒドーはそこを狙う。

そうするとヒドーの視線が僕から外れる。

僕はオークの攻撃を簡単によけると、ヒドーの隙をついて、ヒドーのあごに左ストレートをたたき込む。

クリーンヒット。ヒドーは斃れる。

何故かそれを見てオーガが啞然としている。そんな隙を見せるなって何考えてるんだろう。

僕はそのチャンス逃さずオーガに右ボディブロー。

右手を使っちゃったけど、これは流れの中だから問題ないよね。この体勢でわざわざ左手を使うほうが不自然だし。

オーガは身を「く」の字に曲げて膝をつく。

ヒドーもオーガも軍曹が最初に云った『四人目』じゃない。ちょっとは強いようだけどまだまだ。でもこうやって自由訓練してればそのうち強くなるかも。

オークはまだ立ち上がれない。ヒドーもまだ気を失っている。

ということは僕が勝ったってことだね。

「わおん」と雄叫びを上げ左手を天に向かって突き上げる。

オーガは立ち上がりとうとするけど、ふらついて地面に手をつく。

それを見て、しゃがみこんでた第三兵舎の連中がオーガによって引さずるように僕から遠ざける。

ヒドーもようやく気が付いたみたいで目を開ける。

でもまだ焦点はあってない。きっと脳震盪だからもう少し寝てないと。

オークは仲間に支えられて立ち上がる。

「一回勝ったぐらいで調子に乗るな。覚えとけ」

そう云って唾を吐く。

「うん、判った。覚えとく」

「次はぶちのめしてやる」

そういうと横のオスに肩を借りながら第三兵舎の方に消えていく。

『次は』ってことはこれからも訓練の仲間に入れてくれるってことだね。うれしい。

ま、オークの実力じゃあ僕を『ぶちのめす』ことはできないだろうけど。

僕はオークの消えてった方向に向かってバイバイと手を振った。

ヒドーもちよっとはましになったようで僕を見る目に焦点が戻ってくる。

「勝ったのか」

はじめはなんて云ったのか聞き取れなかったけどどうやら「勝ったのか」と聞いているみたいだ。

「うん、僕が勝った」

第一兵舎の連中が僕らのところへ寄ってくる。でもなんかおっかなびっくりみたい。

ヒドーが身を起こそうとするけど僕が止める。

「まだ寝てたほうがいいよ」

「なんで俺は倒れてる」

「僕の左ストレートを食らって、脳震盪を起こしたから」

「ジロの？　俺はジロにやられたのか」

「うん、僕がヒドーを倒した。僕が一番」

「仲間じゃないのか。てめえは敵なのか」

「仲間？　敵？　グループ戦だったの？　バトルロワイヤルと思った。グループ戦だったんだ。飛び入りごめん」

ヒドーが僕を見て首を振る。

個人戦に見えたけど、グループ戦だったらしい。悪いことをしちゃった。

「で、俺は飛び入りのたった一人のジロに負けた訳か」

「ごめん」

ヒドーはなぜか急に笑い出した。

総合格闘技の訓練グループとは次の日も訓練した。

その日はなぜかヒドーや第一兵舎の連中はいなくて第三兵舎の連中だけ。

それにシャンヤオのグループと違って総合格闘技の訓練は毎日じゃないみたい。

訓練の後「次いつやるの？」ってオークに聞いたたら「知るか」って返ってきたし。

〔中尉サイド〕

内偵のローベルは三日で音を上げた。せめて夜は別のものに監視をさせてくれと云う。

狼人は本当に睡眠時間を削って活動しているらしい。それもローベルがグブアップするほどの長い時間だ。

何をしているのか尋ねると、どうやら槍の訓練らしい。

ローベルの代わりにジアを見に行かせたのだが、やはり夜通し槍の訓練をしていたと云う。

夜以外もいたって真面目に訓練に参加している。成績も優秀だ。リーダーシップは取らないようだが、周りとも打ち解けている。

敵対行動は一切見かけない。逆にここはいいところだと云っているらしい。全く何が目的なのか、まるで判らない。

十日を一区切りとしてその時点で再グループ分けを行う。

このときクズと魔法素質者は振り分けられ別の訓練所に移動する。

クズとは体力的についていけない連中と粗暴で問題を起こす連中だ。

魔法素質者は魔法隊のスカウトが名前をあげて引っ張っていく。

上げられた名前の中にこちらがチェックしていた者の名前がないときは一

応こちらから連絡を入れる。

その者が追加で召集されることもあれば、されないこともある。

体力に問題がある連中でも頭脳や技量があれば技官となり得る。

体力も頭も技量もない者と、粗暴な者はごみ溜めに送る。

魔法は魔法隊。

新兵には料理人志望が多い。

わが軍の入隊志望動機の『料理人になりたいから』は他国と比べて倍以上だ。どうやらわが軍出身の料理人は待遇がよくなるとの噂があるらしい。

優れた料理人も多く、総じて軍隊食はうまい。

同盟国の軍に視察に行ったときに食った飯はまずかった。あんなまずい飯を食ってはいは軍は強くない。兵士のモチベーションが上がる訳がない。

体力に問題があっても料理人として使えればごみ溜めには送らない。

新兵として入隊してくるのはいつも二百から三百人。新兵訓練期間は百日。入隊日は六十日に一度。四十日間は二期が一緒にここで訓練する。

入隊後すぐについていけなくなる奴が出て数は減るがそれでも多いときに数百人。その数が毎日二食食う。少ない料理人でやっていける訳がない。

誰をどこに振り分けるか。それを見極めなければいけない最初の十日が一番忙しい。

見極めのために人をよく見ている。

今期は総じて出来がいい。その中で目につくのは狼人だ。

狼人はどの場面にも登場する。

粗暴な連中には絶えず目を光らせている。最初に問題を起こすのは大抵そいつらだ。

まず連中は徒党を組む。それがいくつかの組となりそれぞれの間で権力闘争を始める。

今期はある程度力がある組が二組と弱い組が一組だった。

ある日その強い組二組が激突した。

普段はしばらく様子を見て、大事になる直前に軍曹たちが介入するのだが今回は違った。

争いが始まるや否や狼人が参戦し、あっという間に双方の組をのしってしまった。

そして勝利の雄たけびを上げた。

翌日、仕返し待ち伏せをしていた一組を再び単独で打ちまかす。それを契機に狼人は二組をまとめ上げそのトップに立った。

トップに立った者は増長するのが通例だが狼人は違った。

ごろつき達と一部のエリート候補を引き合わせ、戦術論や戦略論のレクチャーを始めた。

ごろつき達には各人の特性に合った戦術を指導し、エリートたちとメンバーの特性を考慮した戦略を試行錯誤している。

ごろつき達もそれを面白がって楽しんでるようだ。

ごみ溜め隊はごみの再教育をして団体行動のとれる兵士にしようとする。それを新兵たちが自分たちで行っていることになる。

そんな新兵は初めてだ。今まで見たことはない。

自分たちで更生し始めた連中をごみ溜めに送るべきか、ここに残すべきか悩む。

そんな悩みはこの仕事についてはじめてだ。

暴力的なごろつきと同じような問題として賭博がある。兵士の間で賭博はつきものだ。

賭博と云ってもピンからキリまである。

言葉だけで実際にはもののやりとりは行われないただのコミュニケーション。

『一杯おごる』などの飲食物がやり取りされるもの。

小遣い程度の金銭がやり取りされるもの。

小遣いとは云えない大金がやり取りされるもの。

飲食のやり取りは不問だ。そこまで厳格に賭博を禁止するのはかえって危険だ。

兵士はストレスのかかる職業だ。どこかでガス抜きが必要になる。

飲酒、性的行動、賭博はガス抜きになり得る。

ただし、大金が絡むとガス抜きどころか別のストレスになり、トラブルに発展する。

軍では許される賭率が明確に定義されている。

そして賭け金支払い時のトラブルについての罰則も細かく規定されている。それは経験則から定められたものだ。

そしてその規定訓示の時期も新兵訓練の半ば過ぎが効果的であるとされている。

金銭のやり取りを伴う賭博のほとんどは二個の賽と三十六枚の札で行われるバキャットだ。

各地方によりマイナールールはあるが、基本の統一ルールも定められたがこの国でも行われているギャンブルだ。

役がいくつもあり、賽の目と札によって得点が煩雑に計算されるため初心者にはとっつきにくい。

勝つためには運と駆け引きと計算が程よく必要になる。

新兵の兵舎でもこのバキャットが行われる。

初日は皆とまどいと疲れから行われることは、まずないが、早ければ二日目から、遅くとも五日目にはどの兵舎でも誰かしらが行っている。

今期の第一兵舎は三日目から行われた。

その様子を狼人がしきりに見ていたという。

「参加しないのか」との問いに狼人は「難しくって判らない」と答えたらしい。その割には毎日のように場を覗きこむ。

何人も見て回るのはなく、一人の手札を見てシミュレートしているよう

だ。

「あの手札、ジロならどうする」

ローベルが狼人にそう尋ねた。

それに対して狼人は「レイズ」と即答したという。

狼人の見ていた手札はよくない。十人中九人はおりる手だ。

「ステイならともかくレイズはないだろ」

「やっぱり難しい。僕にはわからない」

狼人はそう云って立ち去る。

その後すべての手札がオープンになったときローベルは目を疑ったという。

全員の手札が悪く、狼人の見ていた手札が僅差で勝ちをとっていたのだ。

狼人の読みはビギナーズラックなのか、生まれながらの博才があるのか、それともバキヤットに長けていながらそれを隠しているのか。

年に一度、水虎族が数名まとめて入隊してくる。

水虎族は山岳地の森に棲む山岳民族だ。

人口は総勢五百人ほど。三十戸程度の集落が数個で形成されている。閉鎖的な民族で自給自足の生活をしている。

しかし、このご時世、完全な自給自足はできない。自分たちで作れない物は他から購入するしかない。

水虎族は毎年数名を兵士として送り出す。兵士となった者たちは十年間兵士を続け賃金を稼ぐ。稼いだ金のほとんどは民族の共有財産として扱われ

る。

兵士以外の出稼ぎをしている者もいないではないが、出稼ぎは兵士がダンツに多い。

兵士は最低限の衣食住が確保されている。それらに対して一切の出費なしに生活できる。それは入手した賃金をそのまま共有財産化できることを意味する。これは大きな利点だ。

民族の方針として兵士となるため、あらかじめ兵士の心構えができています。手間のかからない理想的な新兵だ。

新兵訓練だけでなく、実戦配備された後も優秀な兵士に育つ。

閉鎖的に過ごしていて他民族との混血が少ないせい、魔法素質を持つ者の比率も非常に高い。

一般には五十人に一人と云われる魔法素質者が水虎族は五人に二人の率になっている。そして、入隊時にはすでに初級の魔法を使えるようになってる者さえいる。

二年前の盗賊団との戦闘で大きな成果を上げたのは水虎族の魔法使いだ。

六十年前の大戦中、今や伝説となっている裏谷戸の戦いで敵軍を大洪水で押し流し、五千の兵を一瞬で滅ぼした大魔法使いシャサも水虎族だったと云われている。

優秀な魔法使いを輩出することで有名な水虎族だが、優秀なのは魔法使いだけではない。戦士としても優秀なものが多くいる。

軍は負傷率が高い職業だ。死亡率も高い。大きな戦争がない最近であって



も、勤務ができなくなるような負傷を負う者は一年で百人中五人程度。作戦行動中に死に至る者は一年で百人中二人はいる。

ところが水虎族はここ十年、一人も負傷や死亡での除隊者を出していない。やめていくのは入隊から十年後の本人希望除隊だけだ。

この希望除隊は全ての水虎族が十年目できつかりと申請してくる。

どれだけこちらが慰留を促しても首を縦に振らない。

五年毎の本人希望除隊申請制度も水虎族のために制定されたともいわれている。

戦力として優秀な水虎族だが兵士として優秀という訳ではない。頑固で排他的なのだ。

軍は隊を作って動く。大隊、中隊、小隊。各隊で役を果たしながら全隊で作戦を遂行していく。

隊内のコミュニケーションは重要だ。

水虎族はそのコミュニケーションをほとんどとらない。最低限の意思疎通ははかるがそれ以外はほとんど一人で過ごしている。

ところが水虎族同士だと様子が変わる。

よく話し、よく笑い合っている。

民族内ではコミュニケーションをとるが、他とはコミュニケーションを取らない。

上官は苦勞を強いられる。

兵士は装備を軍から支給される。

ただそれが支給されるのは新兵訓練が終わった後だ。

訓練中は無用のトラブルを避けるため、真剣は支給されない。その代わり、剣の代替品として木刀と、槍の代替品としての長棒が配られる。

通常の訓練や、空いた時間での自由訓練はこの木刀や長棒を使用する。

もちろん訓練で真剣を使用しない訳ではない。

百日間の訓練の後半では剣と槍を中心に真剣で各種の武器の使用訓練を行う。

その時使用する武器は武器庫から持ってくる。

しかし、事前に教官から武器使用申請が出ていなければ一本たりとも武器庫の外へは出せない。さらに返却時には符合により正しく返却されたかを調べている。入隊時にも武器の持ち込みは禁止している。

本物の武器を手元に置くことができるのは、新兵訓練が終わってからだ。

正規兵の装備品は軍から支給されるが、支給品ではなく、自分専用の武器や防具を使う者も多い。

武器、防具の良し悪しはまさに命に直結する。自分の身は自前の装備品で守るのは当たり前の感覚だ。

作戦によっては使用する武器の種類を限定することもあるが、そんな特殊な作戦は滅多にない。通常の戦闘は最も得意な得物を使って戦う。

真剣を持つことができるのは訓練修了時。

新兵訓練の修了式直後は訓練所の門付近で家族から装備品を受け取る新兵たちの姿がよく見受けられる。

水虎族は全員同じ装備を族長代理から受け取る。

頭頂部が金属製の皿でそこから後頭部に向かって首まで金属布が垂れているチェインヘルム。

バジリスクの鱗で作られた左胸と背中一面を覆うスケイルベスト。

そして武器は折り畳み可能な金属製の杖、降妖宝杖。

杖は魔法使いの武器だ。

だが魔法を使えない水虎族の戦士も降妖宝杖を使う。

この杖は通常の魔法杖とは異なり、先端に三日月状の刃が括り付けられている。

槍に似た機能を持った杖だ。

戦士はこれをハルバートのように振り回して戦う。

槍術と思われがちだが正確には杖術。すなわち棒術の一流派だ。

水虎族の使う降妖宝杖の本物は市場には出回らない。

入手できるのは水虎族のみで、入手のタイミングも訓練修了式だけらしい。

修了式後に渡された降妖宝杖は一生もので常に携帯し絶対に身から離さないという。

身から離さないどころか他人にも一切触れさせない。

俺は棒に興味がある。

独特な構造を持ち独特な杖術を展開する降妖宝杖には興味が尽きない。

まだ一兵士として国境警備の任に付いていたころ、同じ中隊に二人の水虎族がいた。

彼らに降妖宝杖を見せてくれと頼んだが、そっけもなく断られた。

しかたなく俺はいつも遠くから眺め、その形状をメモした。

後日、知り合いの鍛冶屋にそのメモを基に杖を作ってもらったが、バランスが悪く手にしっくりこなかった。

この訓練所に配属になってからは年に一度修了式あとに実物を目にしている。

族長代理と親しくなろうとして声をかけたりするのだが、いつもけんもほろろだ。

新兵が自由時間に行っている杖術の訓練に参加させてくれるよう頼んだ時も慇懃に断られた。

その杖術の訓練に狼人が参加している。

訓練の途中で背後に加わり、途中で抜けていく。

水虎族は狼人が参加していることに気づいていないのかとも考えたがそんなことはありえない。

何故狼人は参加を許されたのか。一部だけの参加だからだろうか。それとも

他に理由があるのか。

閉鎖的な水虎族も狼人とは話をしているようだ。

狼人は特別な力を持っているのか。それともあのいけすかない女が水虎族とも交渉したのだろうか。

新兵訓練は最初の十日間で一区切りとなる。

八日間で基礎体力をつける。

八日目の夜は不眠で活動させ、九日目は前日までとは異なり練兵所の裏山で活動させる。

新兵には基礎訓練すら務まらないやつは多い。

八日目までに三割以上が脱落して辞めていく。

気力や精神力だけで八日を持ち切った不適合者を落とすのが九日目と十日目だ。

八日目の夜は寝かさない。

どんな作業でもいいから一晚中体を使わせる。

最近では玉入れゲームをしているようだ。

娯楽性のあることをさせるのはいいことではないが、カリキュラムを考えた教官たちにも独自の理念はあるだろう。多少の娯楽性ぐらいのことには口を出さないでいる。

九日目の朝、俺は新兵全員の前で訓辞をたれる。

「訓練は十一日目以降が本番だ」

「初日からはだいぶ数が減ったが、今までの訓練は準備運動に過ぎない」  
そこから軍の訓練の本当の厳しさを淡々と告げる。そして規律の大切さを繰り返して伝える。

「今云ったことが判らない者、ついていけない者はすぐに名乗り出る。今ま

での給料はちゃんと払ってやる。いや、今日の分もつけてやる。辞める者はいないか」

そう云われて名乗り出るものはまずいない。そこで次にこう告げる。

「今日は軍の厳しさをほんの一部だけ教える。各自背囊を砂でいっぱいにして、それを背負い、支給された木刀を持ってここに集合しろ」

ジャアがその後を引き継ぐ。

「一番遅い奴はグラウンド三周だ。急げ」

新兵たちは蜘蛛の子を散らすように走り出す。

初日はこんな機敏に動けなかった連中がキビキビ動く様子を見るのは気持ちがいい。

背囊を背負い再び集まってきた新兵たちに行進をさせる。

いつもの行進に荷物の負荷が増えただけで今までと何も変わらない。

それをしばらく続け、いつもなら小休止となるところで再び訓辞を垂れる。

「これから進軍訓練を行う。進軍中は教官に指示に従え。指示に従わない者は反逆罪として軍法会議にかける。いいか」

「イエッサー」

「進軍の列からも離れるな。列からの離脱は脱走とみなす。脱走兵は即時処刑する。いいか」

「イエッサー」

「負傷などで進軍の列から離れざるを得ないときは即座に教官もしくは担当軍曹に報告しろ。いいか」

「イエッサー」

脱走についての警告は初日から何回もする。

それは軍にとって脱走が重罪だからだ。重罪だが新兵にその感覚が欠如しているからだ。

何度警告しても、無断で練兵所から抜け出そうとする輩が何人かいる。

練兵所は高い塀に囲われているため、脱走は容易ではない。

脱走を企んでも、大抵塀の前にいるところを警邏の当番兵が軍曹に見つか

る。運がいい者は気弱な当番兵に見つかり、脱走の割の合わなさを延々と論さ

れ、兵舎に戻される。

気弱な当番兵に当たらなかった者は、発見した当番兵もしくは軍曹に叩きのめされ簡易軍法会議にかけられる。

判決は一律不名誉除隊だ。

今期もすでに四人不名誉除隊が出ている。

睡眠時間に活動している狼人は脱走兵と間違われやすい。

一度トラブルになりかけたことがあった。つまらない便宜は図るものではない。手間が増えるだけだ。

脱走兵は出さないように気を付ける。

そのため入隊から八日間は一切外には出さない。

だが九日目は違う。

脱走を誘発させるような動きを取る。

兵士は戦う。人を傷つける。もしくは殺す。

これができなければ兵士として役に立たない。

兵士は団体行動をとる。団体行動より個人行動を優先する者は兵士に向かない。そのような兵がいる軍は弱体化していく。

九日目に何人かを脱走させる。

そしてそれを全員で狩り、処刑する。

その中で団体行動ができるか。人を傷つけることができるか。

それを見極める。

背囊を背負った新兵たちを裏山へと連れていく。

練兵所と裏山の境には塀がある。

普段は施錠された裏門から新兵全員を裏山に出す。

そこには共に訓練する一前期の新兵たちと軍曹たちが待ち受けている。

塀から出たことにより練兵所の外のイメージを与えられるが、実は違う。裏

山はあくまで練兵所の一部で、その先にはもう一つ塀がある。

だがそのことを新兵には告げない。あくまで裏山は練兵所の外だと思わせ

ておく。

「これから行うのは森林進軍訓練だ。以降は教官の指示に従え。これは実戦形式の訓練だ。気を抜くな。実戦中の命令違反は厳罰だ。いいか」

「イエッサー」

軍曹が兵舎毎に山に連れ出す。新兵の周りを先輩新兵が取り囲む。

彼らは半日にわたり、山登り、山下り、その場待機を繰り返す。

前日からの連続不眠訓練。朝食なし。砂の詰まった背囊。

想像よりはるかに厳しい訓練になる。

一番辛いのはその場待機、フリーズの訓練だ。

地べたに伏せ身じろぎ一つ物音ひとつたててすることを禁じる。

戦闘は広々とした見通しのいいところで行われるのではない。市街戦

では家や物が障害となりどこに敵がいるのか判らない。

野戦でも、大抵は森や背の高い草が生い茂った野原が主戦場だ。

視界が悪い中をどこに敵が潜んでいるかを探りながら進軍する。

潜んでいる側は絶対見つかるてはならない。

見つかったしまえば取り囲まれて罠に殺しにされてしまう。

兵士が単体で作戦行動をおこすことはない。

潜伏も単体ではなく隊で行うはずだ。

その状態で一人が発見されてしまえば、隊全体が危機に陥る。

フリーズ中は何があっても音を立ててはいけない。たとえ踏みつけられて

も、蹴飛ばされても動いてはいけない。万が一姿を見つけれられても、死体だ

と思わせなければいけないのだ。

それが仲間の命を守るためにしなければならないことだ。

フリーズはつらいが重要な訓練だ。

そのフリーズがこの日はさらに辛さを倍増させる。

体力的につらい訓練が繰り返され、音を立てたと云っては殴られる。

睡眠不足からの思考の低下。

なぜ自分はこんな訓練をしなくちゃいけないのかとの自問自答。

あと九十日続く訓練への不安。

身体を動かすことを禁じられたフリーズの中で不安な思いだけが募ってい

く。そして。

「練兵所の外にいる今ならここから抜け出せる」

そんな考えに取りつかれ、その声に従ってしまう。

昼過ぎ。裏門まで戻り点呼を取る。

ここで三人以上の不明者がいれば午後はその連中の搜索だ。

今回は二人だった。

新兵にとって残念なことに午後も裏山訓練が続くことになる。

不明者を三名以上としているのは、不明となった原因が脱走でない可能性

があるからだ。

怪我による離脱。寝込んでしまったことによる離脱。それらが無いとは云え

ない。

原因がそれらだとしても、せいづらに脱走の罪を着せ罰することはできる。

朝の訓辞はそのための布石だ。

だができればそんなことはしたくない。

安全策のため不明者を三人用意できなければ訓練を継続して三人目を出す

までだ。

夕刻。

点呼での不明者は三人増え、計五人となる。その内、昼までの二人ともう一人は軍曹たちによって既に確保していた。

だが新兵たちにはそれを告げない。

『五人の脱走者を出した』と新兵たちをなじる。そして脱走者の搜索を命じる。

さすがに休みなく稼働させるわけにはいかない。夜になれば怪我の危険度が増す。睡眠不足で体力がない状態で山に新兵を放つのはさすがに危険すぎる。

兵舎毎に食事と休憩を与え交替で搜索させる。その際も、必ず先輩新兵数人と軍曹がセットになった隊で行動させる。

裏山はかなりの広さがある。だが、隠れるところは決まっている。人の心理は皆同じなのだ。

計画的な脱走であれば簡単に見つからないよう準備しているかもしれない。だが、突発的な脱走では怪しげなところを探せば大抵見つかる。

残る二人の不明者も夜が更ける前に発見された。

これですべての脱走者が確保されたのだが、新兵にはあと一人不明と伝え、交替しながらも夜通し裏山を搜索させる。

明け方に軍曹たちによって残りも確保との偽の情報を流す。

そして、新兵たちをグラウンドに整列させる。

くどくどと兵士の在り方を説く。脱走の重大性を説く。

そして脱走者を連れてくる。

「これより簡易軍事会議を開廷する」

ジア軍曹が議長として俺を選出し、議員として四人の軍曹を指名する。

審議しなくても量刑は決まっている。

自首もしくは確保時に逃げも隠れも抵抗もしなかった者は不名誉除隊。

抵抗はしなかったが隠れていたものは鞭打ち一回と不名誉除隊。

抵抗した者は鞭打ち三回と不名誉除隊だ。

本来、脱走は敵前逃亡とみなされ死刑だ。それから比べれば鞭打ちはかなりの恩情に見えるかもしれない。

が、実際はさほど恩情がある訳ではない。

刑罰に使用される鞭は戦闘用の鞭だ。鎧を着た相手にもダメージを与えることができる鞭で裸の相手を叩く。脊髄を損傷すれば半身不随になる。頸椎が傷つけば死に至ることもある。

そこまでひどいことにならなくても一回の鞭打ちで皮膚は裂け肉が見える。肋骨にもろに当たれば肋骨は折れる。

一回でそれだ。十回の鞭打ちは事実上の死刑だ。

今回の判決は鞭打ちなしが二人。一回が二人。三回が一人だった。

幸いなことに全員が刑を受け入れ反論することはなかった。

ごくまれに刑をよしとせず上告する者がいる。

そのときは正式な手続きによって正式な軍法会議が開かれる。

それまで脱走者は独房に拘留される。

そして正式な裁判となり、所長である俺と担当軍曹、発見者、新兵の代表が証言台に立つことになる。余計な手間がかかるため、証言者の心情は悪くなる。

さらに脱走の正式な刑罰は死刑である。判決もほぼ死刑だ。

状況によっては減刑されるが、それでも片手は失うだろう。上告は全てにいい結果をもたらさない。

「これより処刑を執行する」

俺の宣言と同時に、鞭なし二人が軍曹につれられ退場する。

かわって訓練用人形が運び込まれる。

人形を地面にくい打ちしている間に、残った三人の脱走者たちは服をはぎ取られ全裸になっていく。そして固定された人形を抱くような形で人形に縛り付けられる。

女の脱走者がいるときは全裸にするときひと悶着あったりするのだが、今回はトラブルなくことが進んでいる。

「刑吏」

俺の呼び声にフードを深くかぶった男が鞭を持って前に出る。フードをかぶり顔を見せないのは逆恨みを防ぐためだ。

刑吏の任に就いているのは練兵所の中で一番鞭の扱いがうまい曹長だ。

ジア軍曹が刑吏を左端の脱走者の横につれていく。

「全員、お前から見てこの左端の脱走兵に注目しろ」

ジアが大声を出す。

「こいつは脱走を企てた上に、捕まるときに抵抗し、曹長を傷つけた。それがどういふことか判るか」

ジア周りを見まわす。

「こいつは敵との戦闘中、怖くなったら周りの仲間を殺して逃げだすような奴ということだ。そんな奴をお前らは許せるか。俺は許せない。そんな奴は兵士失格だ、いや、人として失格だ。おれはこんな奴とともに戦いたくない。こいつは生きている価値がない。死ぬべきだ。刑吏。鞭打ち三回。こいつを殺せ」

刑吏が大きく振りかぶり鞭を一回背中に打ち付ける。

血汐と絶叫。続けて二回鞭が振るわれ、尻に赤いバツの字ができる。不意に絶叫が止まる。

静寂。風の音だけが聞こえる。鞭を打たれた脱走兵が失神したのだ。力なく杭にもたれている。

「死んだか。これで世の中からクズが一匹消えたな」

ジアはそう云うが死んではいない。胸の上下は弱いながらも続いている。よく見れば血のしたたりにも拍があるのがわかるだろう。

そのことにどれだけの新兵が気付いているか。

俺は軍曹のオーガに目で合図する。オーガはうなづくと気を失った脱走兵の戒めを解き肩に担ぐ。

今はまだ死んでいないとしても、これだけの傷を放置すれば生死にかかわる。脱走兵といえどもむぎむぎ殺すのはしのびない。

医務室に連れていき傷の手当てをしたのちヒールをかける。傷跡と痛みは残るだろうが死にはしない。

オーガが脱走兵を運び出すと新兵たちの間にざわめきが戻ってくる。

そのざわめきで状況を察したのか残った内の一人の脱走兵がわめきたす。

「いやだ。やめて」

「うるさい。次、鞭打て」

刑事はわめいている兵に鞭を一回振るう。

脱走兵の背中に赤くて太い筋が一本あらわれる。わめき声は一瞬止まるがすぐにより大きい声でわめきはじめる。

大声を出せるのなら命に別状はない。

そばでわめかれる刑事はたまったものではなかったのだろう。耳元で何かを囁いている。

と、わめき声がやみ『くっ』と息をのむ声だけになる。何を云ったのかわからない。あれだけの効果があるなら今後のためにも後で聞いておこう。

今度は俺の合図を待たず、ギド軍曹が、痛みに耐える脱走兵をかたずける。

「お前らの中で刑事に代わって残りのクズに鞭打てる奴はいるか。打てる奴は前に出る」兵は命じられれば何事であってもしなくてはならない。たとえそれが人を傷つけることでも、殺すことでも。

多くのものが尻込みをする中、何人かが前に出る。前に出たもののほとんど

は攻撃するのが好きな乱暴者だ。

目をつけている第三兵舎のホーと第一兵舎のヒドーも前に出た。

狼人とお坊ちゃんも前に出たがあれは何を思っただけに出たのか。一応後で確認しておこう。

【次狼サイド】--2021/10

十日のうちにいっぱい辞めていった。

こんないい所、どうして辞めちゃうんだろう。

鞭打ちされた三人も辞めてった。あれは辞めたんじゃなくて辞めさせられたのかも。

ここから追い出されるなんて、かわいそう。

僕に鞭打たれて腕を吊ったオスが追い出されたとき、僕をにらんでいた。きつとここに残る僕がうらやましかったんだ。

辞めたんじゃないけどほかの場所に移ったのも八匹いる。八匹のうち二匹はシャンヤオのグループ。自主訓練の仲間が減ってちょっと寂しい。

大勢辞めたから四つあった兵舎は二つになっちゃった。第一と第二兵舎が一つになって、第三と第四がくっついたって感じ。

だから志狼とはまだ別の兵舎。もっと減ったら兵舎は一つになっちゃうのかな。

兵舎統合と同時に班も再編成になった。ミヒヤとローベルと僕、そして第二兵舎だった三匹が一緒の班。班の名前は『第イチマルイチ訓練班』で通称ヒ



トマルヒト。今後はこの六匹で訓練するんだって。

班には班長と副班長がいる。訓練中は五日ごとに班長が代わる。最初に班長になったのは 그리스。第二兵舎だった茶髪で色黒の人間種。副班長がミヒヤ。

僕は 그리스 やミヒヤの云うことを聞いていればいいだけなので楽。

ああしろ、こうしろって云わなきゃいけない班長や副班長は大変そう。やりたくないな。

これからが本番だって中尉が云ってたけど、十一日目以降も訓練の内容はさほど変わらない。

右を向いたり左を向いたりする訓練が減って、棒を持って四つ這いで進んだり、這いつくばって進んだりする訓練が増えたぐらい。

いつになったら本当の訓練が始まるんだろう。

十六日目にミヒヤが班長になった。僕は副班長。

このころから棒を使った戦闘訓練が始まった。棒を剣に見立ててみたい。

僕は剣より槍のほうが好きだけど訓練だからしょうがない。

剣は好きじゃないといっても、周りのみんなよりは上手に使える。

何匹かが剣を教えてほしいと云ってきたので、ローベルを紹介した。

相手をしなくちゃいけないなくなったローベルは僕のスパイをする時間が減る。

それは僕に有利になる。今後何か見つけてローベルに押し付けよう。副班長をやっている今がチャンスだ。

他の奴に指示を出すなんて面倒でしかないと思っていたのだけど、いいこともあるんだ。利用できるのは利用しないと。

棒の訓練は他の訓練よりちょっとだけ危ない。棒を振り回すから当たると痛い。打ち所が悪いと怪我をする。

そんなことは云われなくてもわかる。

でもここはみんな親切だからわざわざ口に出して教えてくれる。訓練の前には軍曹が「注意しろ」って云うし、班長もしょっちゅう注意してる。

この日の訓練は棒を使った突きの訓練だった。突きは槍の動きに近いから得意。

今回の棒は片手剣に見立てているから握りが短くて槍のようにには持てない。

長さも短くてそこは気を付けないといけない。

いつも通りみんなで型をやって、突きの動きを覚える。そのあとは二人一組で訓練。

ローベルはいつも僕と組みたがる。きっと僕の弱点を探しているんだろう。

その弱点を中尉とジア軍曹に教えて三人で僕を斃すつもりなんだ。

はじめからそれが判っているから得意なところでわざと失敗したり、苦手なところを頑張って上手にこなしているよう見せたりしている。

美月様から七割の力しか出さなって云われているから、わざと失敗するのはちょうどいいはず。

それとローベルと組むのは僕にとってもいいことがある。ローベルが僕の

弱点を探しているように、僕もローベルの弱点を探すことができるから。

僕が見る限りローベルは剣とナックルが得意。剣の中では居合い。一撃必殺タイプ。

僕はどちらかというと持久型だから相手を封じて戦いを長引かせれば有利になる。

でもそんな動きは見せない。まず先に動いてこっちも一撃でローベルを斃そうとする。

二度三度攻撃を続けて、その後は急にゆっくり動き肩で息をする。

そしてローベルに打ち込ませ、痛いふりをする。

本当に打たれるのは嫌だから、棒が当たる瞬間に体をひねって力を逃している。

わざと負ける時もあるから勝率は四割ぐらい。ちょうどいい数字だね。

僕はローベルと、ミヒャは 그리스 といつも組む。班は六人だから残りはヤンとパウロ。

ヤンはちよつと気弱なタイプ。パウロはお調子者。いつもふざけている。

訓練の時もふざけているのを見つかって軍曹にどやされている。

ちゃんとしてれば叱られないのに、何故わざわざどやされることをするんだろう。

人間種の考えることは理解できない。

突きの訓練も最初はまじめにやっていた。でも途中で飽たのかふざけだした。

ヤンが胸に向かって突きを出すと、わざと体を低くして顔を前に出し、当たる直前にスツと顔を動かしてニタニタしてる。

一步間違えば顔に当たって痛い思いをする。そうなくてもパウロの自業自得だ。

危ないけど注意しない。僕はローベル相手に小細工しなきゃいけないからパウロを気にかける余力はない。

ギヤアツ。

パウロと思《おぼ》しきうめき声が出た。

ローベルがそっちを見る。あからさまな隙だから罠かもしれないけど、ま、いいや。

僕が喉を棒で突くと、ローベルは避けずに膝をついた。罠かと思ったけど違うみたいだ。

「僕の勝ち」

そう云うとローベルは何か云いたげに僕を見たけど、頭を振って咳をした。

どこか非難めいた眼だったけど、戦場で他に気を取られるほうがいけないんだ。近くで爆発魔法を使われても気にしないようにしなければ死ぬのは自分だ。

今は死ぬなって云われているから死ぬないし、そうじゃなくても死んだら絶対、美月様に文句云われるから死にたくない。死ななくても瀕死で作動する

強制帰還アイテムが発動した時点で文句云うんだろうな。

だから周りの音ぐらいいじゃ動揺しない。普段からそう心がけてる。それを怠

ったのに僕を非難するなんてローベルも自分勝手だ。

「大丈夫ですか」

一番にパウロに近寄ったのはミヒヤだった。ローベルも喉を押さえながらパウロのもとへ行く。

ミヒヤは目が悪いのかな。それとも頭が悪いのかな。

パウロの左目にはヤンの棒が刺さっている。目玉は完全に潰れている。大丈夫の訳がない。

騒ぎを聞きつけてギド軍曹もやって来る。

「訓練停止、休め」

そう叫んだ軍曹がパウロを抱きかかえ、刺さっていた棒を引き抜くと潰れた目玉も一緒に飛び出した。

パウロはまだうめいている。ヤンは茫然としている。

ミヒヤとローベルがパウロを担ぎ、軍曹が先導して建物の中に消えていった。

僕とグリスはただ突っ立っているヤンのところに歩み寄る。

僕が棒を拾ってビシュッと振ると、先についていたパウロの左目が飛んで行った。

さすがにあそこまで損傷しているともう使えないから、拾わなくていいよね。

僕が棒を渡すとヤンは条件反射で受け取る。けど、棒の先の血を見てヒッと唸って投げ捨てる。そしてワーとわめきだした。

「大声出すとうるさいよ。静かにしようよ」

僕がそう云っても聞く耳を持たない。グリスは肩をすくめて周りを見回す。僕も見回すと棒訓練教官の軍曹が目に入る。

「ジャ軍曹。ヤンは混乱しています。副班長としてヤンの医務室への移動を提言します」

「許可する。今すぐ連れ出せ」

「イエッサー」

「イエッサー」

僕に少し遅れてグリスが答える。そして僕ら二匹でわめき続けるヤンを建物の中に連れて行った。

医務室がどこか僕は知らない。でもグリスは知っていて案内してくれた。

自分には関係ないと思っていた医務室もこんな風に使うことがあるんだ。これからは関係ないことも気にするようにしよう。

医務室につく頃にはヤンも落ち着いたようでわめかなくなった。耳元で怒鳴られるのは嫌だったから、黙ってくれてちょっと嬉しい。

医務室にはミヒヤたちもいた。僕は白衣を着た人間種にヤンの様子を伝えて引き渡した。

白衣はうなづいただけで、すぐにパウロの目の治療に戻った。ヤンは放置だけど引き渡したから僕の役目はもう終わりだね。

「じゃ、僕は戻るね。ミヒヤもローベルも戻っていいんじゃない」

二人はただパウロを見ているだけだった。見るだけなんて何の役にも立たない。

「僕が残る」

「何のために残るの。ミヒヤはヒールやキュアが使えるの」

「使えないけど、心配だから僕は残るよ」

どうやらミヒヤは棒訓練をさぼりたいらしい。生真面目だと思っていたけど、そうでもないのかな。

昼過ぎにヒトマルヒト班が中尉に呼び出された。でも中尉の部屋に行ったのはミヒヤとローベルとグリスと僕だけ。ヤンもパウロも姿を見せなかった。

始まったのは尋問訓練。僕たちの班が尋問される側。今回は味方からの尋問訓練で正直に答えればいいだけ。だから楽。

こんな楽な訓練に來ないヤンとパウロの気が知れない。そう思ったけど、後から聞いたらパウロはまだ医務室で寝てたんだって。可哀そうなパウロ。

まずは個室の僕だけ入って個別尋問。尋問するのは中尉とギド軍曹。正直に答えるだけだから、すぐ終わった。

あまりに早かったからかギド軍曹が敵からの尋問訓練も行うって云ってきいた。すぐに云うことを変えるなんて、やっぱりギド軍曹は美月様と同じで気まぐれ屋だ。

敵の尋問には正直に答えちゃいけない。でも嘘ばかりだとすぐにばれち

やう。適度に嘘と本当を混ぜて敵を混乱させなきゃいけない。

証言が理路整然としていると嘘をついてもそれがばれずに敵は混乱しない。だから話に矛盾点を作らなきゃいけない。考えることがたくさんあるから敵からの尋問は疲れる。

個別尋問のあと少し待たされて集団尋問になった。

尋問するのは中尉とギド軍曹とジア軍曹。

尋問されるのはヒトマルヒト班。

でも誰もローベルには聞かない。それはそうだね。ローベルは中尉とジア軍曹の仲間なんだから。

僕もあまり聞かれなかった。主に答えていたのはミヒヤ。

ミヒヤはしきりにパウロの怪我は班長の自分の責任だって云っていた。

なぜそんなこと云うんだろう。怪我にミヒヤは何も絡んでいないのに。

これは味方からの尋問訓練だから嘘を云うのはだめだよ。

ミヒヤは頭がいい。人間種の割には体力もある。剣も多少は使える。話も僕よりわかりやすい。だから優秀だと思っていたんだけど。

こんなところで味方を混乱させる嘘をつくなんて、頭はよくなかったみたいだ。

それとも本当に自分が悪いと思っているのかな。そうだとしたら状況判断が間違っている。

どちらにしても、頭はよくない。

僕から見たパウロの怪我は単純だ。

訓練中にふざけていたパウロの目にヤンの棒が刺さった。それだけのこと。悪いのはパウロ。痛い思いをしたのもパウロ。

ちゃんと訓練していたヤンは悪くない。

関係ないミヒヤが悪いわけがない。

ショックでヤンが我を忘れたのは理解できないけど、あの程度で取り乱すようなら兵隊は辞めたほうがいい。

衛兵だって美月様に腕を折られるんだ。

戦争に行く兵隊なら、腕もげたり、死んだりするのは当たり前だ。

「では最後に聞く。ミヒヤ班長、今回のパウロ訓練兵の怪我の原因と責任は何だ」

中尉が偉そうに聞く。これでやっと終わりらしい。

「怪我の原因は班長のぼくが注意しなかったことで、ぼくに責任があります」

「そうか、では副班長のジロ。副班長の意見は」

やっぱり中尉は僕を敵視している。最後の質問と云って僕を油断させ『最後』の後に僕に質問してきた。そんな手を使う中尉はこれからも注意しないと。

「ふざけたパウロがいけないから、パウロの自業自得です。中尉」

「自業自得だから看病もしなかったのか」

尋問は相手の嫌がることをチクチク云ってくることだから、中尉のこの嫌味は正しい。

「違います。中尉。看病しろとの命令を受けていなかったからです。中尉。

それに僕はヒールもキュアも使えません。治癒アイテムも所持してません。

僕が看病しても状況は変わりません。なので、僕の看病に意味はありません」

「命令があれば看病するのだな」

「イエッサー。看病が必要ですか」

「いや、不要だ。但し、同じ班の仲間としてももう少し気にかけてやれ」

「イエッサー」

「よし、以上だ。全員、通常訓練に戻れ」

「イエッサー」

「いや、ローベルは残れ」

「イエス、サー」

やっぱり中尉と軍曹とローベルはグルだ。集まって情報交換と打ち合わせをするつもりだ。

弱点を見破られないように今まで以上に中尉とジア軍曹とローベルに注意しないと。

パウロの怪我のことを美月様に報告したら、キュアポーションを渡された。

中尉からも気かけると命令されたので、朝の食事訓練の時、見舞いに行っ

た。せつかく行ったのにパウロは寝ていた。寝ているパウロの鼻をつまんで渡

されたキュアポジションを口から流し込んだら、むせて目を覚ました。だから「おはよう。早くよくなつてね」と云つて兵舎に戻った。

〔中尉サイド〕--2021/12

軍人には二種類の間がある。部隊を指揮する者と、云われるとおりに動く者だ。

指揮する者は指揮官となり隊をまとめる。指示通り動く者は兵士として忠実に命令を遂行する。

そのどちらにも軍に必要だ。

指揮官だけでは敵と戦えないし、兵士だけでは作戦を立てられず負けてしまう。

訓練兵がどちらのタイプか見極めるのもこの練兵所の仕事だ。

最初の十日でクズを分別するように、指揮官候補になるかも十日で見分ける。ただ、十日だけでは埋もれた才能を見逃す可能性もある。

そのために十一日目からは順繰りに班の指揮を任せて適性を見るようにしている。

そこで適性ありと判断されれば、訓練後期は指揮官候補の訓練を受け、練兵所を出た後もそれ専用の訓練所にまわされる。そしてゆくゆくは尉官となり軍務に当たるのだ。

中尉の俺から云うことではないが尉官はエリートだ。ちょっとやそつとはなれない。兵士は何年勤め上げても曹長じまりだ。

才能があるものは一、二年でそれより上の少尉になれる。かなり年上の軍曹、曹長に命令することになる。

その代わり責任は大きい。一つの判断誤りが部隊を危機に陥らせることになる。何十人、何百人の命を奪うことになる。

指揮官は損害を受けないようにして勝利に導く。兵は命に従い勝利を目指す。

勝利すればそれは優秀な指揮官と有能な兵の手柄だ。もし負ければそれは無能な指揮官の責任だ。

指揮官タイプの新兵は少ない。魔法の素質を持った者のほうが多いくらいだ。

今期では今の時点で三人が候補に上がっている。二人は貴族のおぼっちゃんで、一人は第一兵舎の狼人だ。

練兵所の所長となると新兵全員の素性を見ることが出来る。

建前上、軍は貴族も平民も関係ないとされる。そのため、素性が公開されることはない。故に出自を知ることができる者は少ない。所長はその数少ない者の一人だ。

貴族の一人は下級貴族の第一子だ。軍で出世してより高位に上がりたいと思っているのだろう。

もう一人は狼人と同じ班のミヒヤエルだ。これは地方領主の第三子となっている。

第二子の誕生日とは十日だけ違う。乳兄弟を養子にしたのか、それとも別腹の子なのかまでは判らない。調べれば判るかもしれないがそこまでする気はない。

班が同じなのでついでにローベルの様子を見させているが、この男も曲者だ。ミヒヤエルではなくミヒヤと名乗り大店の息子を自称しているらしい。

戦闘訓練に怪我は付き物だ。はじめのうちは真剣を使わないので、大抵は打ち身、打撲だ。骨折することもまれではない。

打ち身は放置だ。骨折になるとヒーラーの手当てが入る。養生に数日かかっても、本人が希望しなければ除隊とはならない。怪我ぐらいで除隊させていたら軍人は一人もいなくなってしまう。

その事故は木刀での訓練中に起きた。木刀の先が目をついた。

かすただけなら大した問題にはならなかっただろうが、今回は完全に眼球に突き刺さってしまった。

負傷者は直ちにヒーラーのもとに運び込まれた。

故意に怪我させたのではない限り負傷させた者が罪に問われることはない。看過できない不注意があれば罰を受けるが罪にはならない。

重大な事故であれば、故意か、不注意があつたかを調べる査問会が開かれる。そして片目を失うのは重大な事故だ。事故当日の昼過ぎに査問会が開かれた。

事故が起きたのは狼人と貴族の第三子が属する班だった。班のうち怪我を

させた者と怪我した者の当事者二人を除いた四人が会議室に集められた。

仲間が負傷すれば動揺するのは普通だ。だが集められた四人のうち二人は平然としていた。

一人は場慣れたローベルで、もう一人は狼人だった。

ふてぶしさを感じる狼人の態度に苛立ちを覚えた俺は強めの言葉で査問会の開会を宣言した。

「今から今回の事故についてお前たちを尋問する。正直に話せ」

ミヒヤエルとグリスが緊張の面持ちで「イエッサー」と返す。

「質問があります。中尉」

そう聞いてきたのは狼人だ。

「なんだ。云ってみろ」

「この尋問訓練は敵からの尋問を想定した訓練ですか。それとも味方からの尋問ですか」

「どう違う」

「味方からの尋問でしたらすべて正直に話します。敵からの尋問でしたら嘘を混ぜます」

「味方からの尋問だ。すべて正直に答えろ」

「イエッサー」

査問会は訓練ではない。正直に答える以外は許されない。なぜそれをわざわざ

ぞ確認するのか。『尋問』という言葉を使ったことに対する当てつけか。

「ではまず個別尋問を始める。ジロ、来い」

狼人を隣の小会議室に入れ机を脇にやる。そして椅子を壁に向ける。

「座れ」

「イエッサー」

通常の査問であれば机を挟んだ対面で行う。それをせず狼人の背後に座ったのは『尋問』を行うためだ。

背後からの問答は対面より緊張感が増す。不安が募る。これが『尋問訓練』というなら形だけでも尋問してやろう。

「何があったか話せ」

狼人が云うには、負傷したパウロが自ら木刀の先に顔を出したとのことだ。

狼人はその時の様子を冷静に描写してみた。

パウロが怪我を見てもすぐに駆け寄らなかったが、それは戦闘訓練終了の合図がなかったからだと云う。

戦闘中に相手を無視して味方を助けに行けば、死ぬのは自分だと云った。

確かにそうだ。だがあれは実戦ではなく訓練だ。狼人の考えは人として異常だ。

確認の個別査問を終え、再び全員を会議室に集める。

最後に「事故の責任は誰にある」と聞くとミヒヤエルは「班長の自分にある」と答えた。

その答えからしても、ミヒヤエルには指揮官としての資質がある。

狼人はだめだ。すべてが命令だ。命令があればその通りに動く。それは完ぺきといえるほどに。

でも命令がなければ何もしない。それでは指揮官にならない。

我が国の軍で隻眼の兵は一人だけだ。最近話題になっている隻眼のシウバだけだ。

怪我では除隊とならない。ただ、隻眼や隻腕では戦闘で勝てない。だから文官として勤務することになる。

職業として軍を選んだものはそれを受け入れるが、戦闘行為に重きを置いて入隊した者は子供にもできる小間使いに嫌気がさして除隊していく。

除隊を申し出ない者を除隊するように仕向けるのは上官の役目だ。

パウロも片目を失った。それを理由に除隊させることはできない。だが、兵士としては役に立たない。除隊するように仕向けるのは俺の役割になる。

唯一の例外のシウバは優秀な兵だった。戦闘に参加すること四回。毎回一人以上の敵を斃し、自分は無傷で戻ってきた。

五回目の出撃で三人を戦闘不能にし、合図とともに離脱しようとしたとき、流れ矢に当たって左目を失った。どうにか野営地まで退き、応急手当てを受け、前線から後退。療養もかねて後方待機となった。

その後、当然のごとく文官勤務に異動。一年後、除隊を勧める上官に対し、前線復帰を志願。試験と称した模擬戦を行ったところ、五戦して五勝。それ



もその内四戦は圧倒的な勝利だったと云う。

常に声をたてて笑いながら闘うその姿はまるで狂戦士のごとくと噂された。だが、それは特殊な例だ。パウロがそうなることはないだろう。

事故の翌日の昼前、医務室のヒーラーから来てくれとの依頼があった。怪我人の容態が悪化して死んだのかと思ひ駆け付けた。

怪我程度ならどうにでもなるが、死亡事故となると書類一枚で済ます訳にはいかない。加害者に非がなかったとしても、それなりの処罰が必要になる。

医務室に入ると負傷していたパウロがベッドに腰かけていた。頭に巻かれていた包帯はほどかれている。そして、なくなったはずの眼球は元に戻っていた。

昨日の報告では木刀が右の眼球にささり、木刀を抜いた時に失われたはずだ。

実際にその状態を見た訳ではないが、ヒーラーが嘘の報告をするとは思えない。

パウロは俺を見てひるんだ。所長の中尉が鬼の形相で飛び込んでくれば、そういう状態になるのは不思議ではない。

「どういことだ」とヒーラーに問いたとしても「わかりません」と答えるだけだ。

「パウロ訓練兵。具合はどうだ」

「良好です。悪いところはありません」

「何が起きたか覚えているか」

「訓練中に木刀が顔に当たり目を負傷しました。その後は痛みに耐えながら寝ていました」

「右の眼球はなくなったはずだ。何故ある。物は見えるか。痛みはあるか」

「物は見えます。痛みはありません。目ん玉は。やはりなくなっていましたか」

パウロが右目を押さえる。

「なくなったものが何故、今、ある」

右手で右目を押さえたまま、パウロは考えている。そして何かを決心したように手を下げ俺を見た。

「滑稽で荒唐無稽なことを云います」

しばらく黙って俺を見たのち、視線を下に落とした。

「昨晩は痛みで眠れませんでした。明け方になってウトウトしはじめたとき、軍神リオネル様が夢枕に立ちました。そうしてこう云ったのです」

お前は何の為に軍に入ったのか。国の為、人の為。その為に軍に入ったのではないのか。その心意気を思い出せ。そして訓練時のお前の行動を反省しろ。お前の行動はお前がすべきこととは違っているはずだ。お前はここで倒れるべき人間ではない。国の為、人の為に働くべき人間だ。それが出来ると俺が見込んだ人間だ。お前に一度だけチャンスを与える。心を改めよ。精進せよ。国を救い、人々を助けよ。」

「そう云うと私の目に手を当てたのです。私の目は温くなりました。そして目が覚めたとき、痛みは消え、目も見えるようになっていました」

パウロは再び俺を見た。両方の目には決意があふれ光り輝いていた。

「軍神は奇跡を起こしたというのか」

「荒唐無稽であることは認めます。ですが、それが私に起こったことです」

俺はヒーラーを見た。ヒーラーは一度うなづいた後、首を横に振った。

「お前は神徒か。それとも宗州者か」

「いえ、神徒でも宗州でもありません」

「神徒でないお前を軍神が救ったと云うか」

「軍神リオネル様には入隊前に門横の像にお祈りしました。それで氣にかけくれたのかもしれませんが」

軍の守護神は獅子神リオネルだ。門の横には小さな立像もある。信者でなくともその像に祈りを捧げながら門をくぐるものは多い。

だがそれら全員に獅子神の加護があるなんてことはない。全員に加護があれば訓練中の怪我はなくなる。戦闘中の負傷や死亡もなくなるだろう。

だがパウロのこの治り方は神の奇跡以外の何物でもない。

ヒールは傷を治すが、欠損部が復元することはない。欠損部を戻すには失われた魔法のキュアが必要だ。

体に不調がなければ訓練兵を遊ばせておく訳にはいけない。パウロは昼過ぎに訓練に復帰した。

一日程度で治る怪我は日常茶飯事だ。怪我した者もさせた者も罪に問われることはない。

パウロが一日で復帰したのなら誰も罰する必要はない。

査問会は解散し、この事故についてはすべてが終了した。

パウロの負傷から十日ほどたったとき、ふとヒール中尉の言葉を思い出した。

『低位のキュアが発動するワンド』

眼球の再生は『低位』のキュアで可能なのだろうか。可能だとすると、今回の件にあの女は絡んでいるのだろうか。

そう云えばあの女も隻眼だった。

キュアで治るなら何故自分の目は治さないのか。それともあの眼帯はダメで、隻眼のふりをしていただけなのか。

座学の後、偶然を装い狼人を待ち受け、聞いただした。

「ジロの雇用主のあの女は本当に隻眼か」

「隻眼であります。中尉」

「眼帯の下を見たことがあるか」

「はい、中尉。眼帯の下はくぼんでいて、そこに青と赤の宝石をしまっています」

目の中に高価な宝石を隠すとはいかにもあのいけ好かない女らしい。だが隻眼は本当だった。であれば今回の件にあの女は無関係だろう。目を治

せるすべを持ちながら治さないなどありえない。

部族は特別待遇？

・希望——夢想——力と技量——俊敏性——兵としての活躍

・不安——希望の裏返し——ナンシヤにはかなわないのでは

・狼人と女が戻ってきて列の最後に並ぶ

女が狼人を氣遣っている

種属が違うが家族？

深沙(シエンシヤ)版 Op.

Title: 新兵練兵所

Place: 練兵所門前

Characters: シエンシヤ、ナンシヤ、次狼、志狼、美月

Outline: シエンシヤの入隊までの回想と希望と不安

Events:

・シエンシヤは何故兵組を希望したか

兵組とは——部族の出稼ぎ組のこと      ↑不要

何事も優秀な双子の姉

魔法を使える姉と使えない自分

優雅優美な姉

体力は自信(身体は鍛えていた)

杖術にも自信(杖術は姉に勝つ)

兵組だった憧れの叔父(母の弟)

・二人の狼人と女が一人中に入っていく

挨拶している人もいる

兵組を希望したのは叔父の影響

数年に一度戻ってくるたびに遊び相手だった叔父が好青年に成長していく

話を聞くうち自分も叔父と同じになりたいと思うようになる

ナンシヤとのこと

獣は多産、部族も多産が多い↑獣人の血が混じっている？

姉妹の仲はよく双生児の姉はよくしてくれる

姉は何の意識もしていないようだが、優秀な姉に対して意識してしまう自分

分がある

過剰反応と判っていてもやめられない

「閉鎖性については疑問を持たないように教育と意識付けをされている」

「誰も疑問を持っていない それ以外の世界があることを無意識に認めな

こ」

「それ以外の世界は自分の住む世界とは別物」

他者の価値観を知らしめないための閉鎖性↑他者の毒性を排除するためと教育されている

それでも最低限のものを買うため外との交流は必要

出稼ぎはやむにやまれぬ制度

基本は村を出たがらず、出稼ぎを希望するのは異端的な考えがある者が多い

受け継がれる杖

兵士は代々の杖を貰う

シェンシャの家には兵勤務が少なく、残っているのは叔父の杖

他には父方に一本あったがそれは従兄が使用中

兵士は思うほど危険ではない 日常も危険がある 十年生存率では兵士の  
が上

医療技術は部族内より軍のがはるかに上

引退後も山岳地帯の獣や魔物に対するのに兵の経験は役に立つ技能

怪我也少なくなる↓優秀とみなされる↓伝説化の対象になりうる

鍛えてたことと実体験からくる自身↑集落の中では敵なし

兵としてもそれを続けられるか不安

若いころの十年間は大きい↓それに対する補てんあり↓英雄視されもてる  
↓帰還後すぐに配偶者はよりどりみどり

軍の中でも部族は役に立つとの噂あり

あからさまではないが優遇されているらしい

当然結果も求められる↑内外からのプレッシャー

それに見合う仕事ができるか不安がある

一般人は優遇がないから、根回しをしたりする

でも優遇があればプレッシャーになる↑有利か不利かまだ判らない

深沙(シェンシャ)版 Ed.

Title: パーフェクト・ソルジャー

Place: 練兵所門前

Characters: シェンシャ、族長代理、次狼、美月

Outline: 理想の兵士像と杖の奪取失敗

Events:

・降妖宝杖授与式

成果披露の模擬戦

棒戦で圧倒的勝利

姉の特大魔法―叔父の杖は姉へ

・次狼と美月の模擬戦

次狼の戦闘力

攻撃力も今迄見たことがないほどすごいが防御力はずっとすごい

死なない＝完璧兵士？

負けそうな次狼に対する応援―新兵たちの同志感覚

・美月の降妖宝杖

軍の兵士としての使命を上回る水虎族としての使命

降妖宝杖は一族の宝―他族には触れさせない

族長代理に認められたい

・奪取失敗

次狼の行動力―パーフェクト・ソルジャー

防具を含めた武装解除

・「いめん、痛くするよ」

穏やかに告げる美月の顔に恐怖

次狼本格訓練と事故

Title:リーダーシップ

Place:練兵所

Characters:次狼、ミヒヤ(ゲスト主役)

Outline:ミヒヤの発揮するリーダーシップは兵に必要な

Events:

・新兵は半分以下に兵舎も四つから二つに

魔法組の異動

屑箱への異動

班のメンバー紹介

・訓練内容の変化

実戦形式

当番兵―雑用、調理

・警備当番(門兵)からの帰り道

右腕を吊った男ににらまれる

脱走兵からの逆恨み

・持ち回り制の班長

班長の役割―ただの名目

・訓練中の負傷事故

・班メンバーの失敗と班長の責任

ミヒヤの責任の取り方

ミヒヤ―メンバーの失敗は班長の責任

次狼―本人が責任を負うべき

次狼―罰と責任は別で班の失敗で班全体への罰は当然

ミヒヤ―班の失敗は班長が負うべきで戦争もそう

悪いのは命令者か失敗者か

意見の相違への謝罪

「なんで謝るの。僕は意見を言えと言われたから云っただけ」

深沙(シェンシャ)IM 練兵所の恋愛事情

Title:恋人たち

Place:練兵所

Characters:シェンシャ

Outline:閉鎖空間での恋愛事情

Events:

・夜中のトイレの際、杖術を訓練する次狼を発見

仲間から次狼との関係の冷やかしかしー次狼は必ず自分の後ろで訓練

水虎族の結婚観

姉と自分の人気の差ー活発に振る舞うことの弊害

・夜中にうろつくのほかに雄猫がいた

嬌声

男同士の性行為

・シャワー室内の視線

・情事の時間をもったいない

今は訓練で鍛える方が有益

ジァ軍曹…軍事教官

ギド軍曹…第一兵舎担当(ドワーフ)

第イチマルイチ訓練班…通称ヒトマルヒト班